噴火当時の新聞記事

昭和 37 年（1962 年）の焼岳火山の噴火に関する新聞記事（写し）を収集しました。

＜資料提供者＞

筒木重市氏

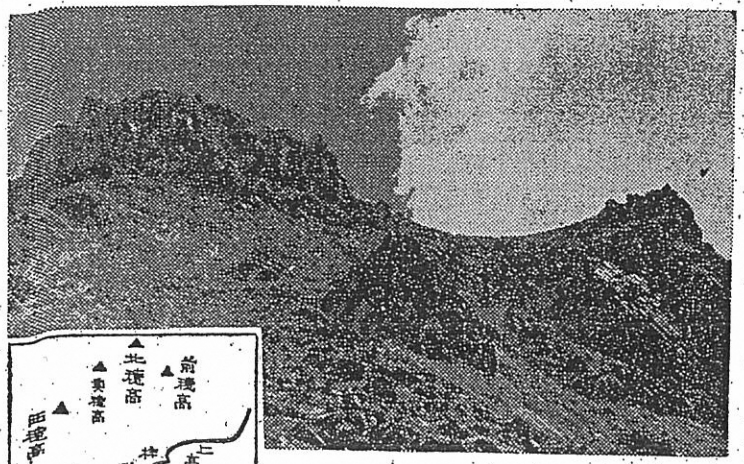
提供記事：信濃毎日新聞、毎日新聞、朝日新聞

※岐阜日日新聞（現岐阜新聞）については岐阜県において収集したものです。

6.18 朝刊 信毎

北ア焼岳、30年ぶり爆発

噴煙二千、上高地に降灰



噴火まえの焼岳頂上ふきん

十七日夜、北アルプス焼岳（標高二、四五八㍍）が噴火した。噴火の規模ははっきりしないが、三十年ぶりの噴火で、焼岳小屋などに宿泊している登山者、小屋従業員の安否が気づかわれている。

焼岳は午後九時五十分ごろ、ものすごいゴー音とともに噴火、頂上から黒い煙がふきだした。上高地辺では火柱はみえなかったというが、午後十一時なお煙と灰が上高地の夜空いっぱいにひろがっており、午後十時すぎ、一時は頂上が展望できるようになった。この日、上高地から焼岳方面への登山者は約二百人。ほとんどが同日中に下山したが、焼岳小屋、西穂小屋には約二十人が宿泊しているもようとくに頂上ふきんの焼岳小屋には従業員二人が宿泊しており同夜地元・安曇村消防団二十人の救助隊が現地に向かった。

焼岳は、日本アルプス上高地の南西、長野、岐阜の県境にある鐘状活火山で、頂上付近はいつでも噴煙をあげている。焼岳の噴火は、大正四年のものがもっとも大きく、このとき溶岩が流れだして梓川をせきとめ〝大正池〟ができた。その後は、大正十一年から十四年、昭和二年、昭和六年―七年にそれぞれ爆発があり、昭和二十八年には噴火はなかったが鳴動、地震があった。

上高地西糸屋主人奥原教永さんの話　ゴーというものすごい音がしたので、外にとびだしたら焼岳の小屋付近から黒煙が空いっぱいにふきだしていた。まもなく頂上はみえてきたので、山容をかえてしまうほどの噴火ではなかったようだが、昭和のはじめにあった噴火いらいみたことはなかった。黒い灰が上高地にもふっているので、心配している。

地鳴りと爆発音、きのこ雲

帝国ホテル管理人木村殖さん（北ア遭難救助隊長）の話　ゴウという地鳴りと爆発音におどろいて外にとびだすと、きのこ雲があがり、みる間に高さ二千㍍ぐらいになった。間もなくきなくさい黒いガスがいっぱいにひろがってきたので、何もみえなくなった。灰がふりはじめたが、いぜん地鳴りと鳴動がつづいている。爆発した位置は、溶岩の火もみえないし、噴煙の出た場所からみて中腹で、岐阜県側とみている。私が上高地にはいってから昭和六年まで小爆発がつづいたが、こんな大爆発は、はじめてだ。

ふもとの部落民が避難

岐阜県上宝村

岐阜県警本部にはいった情報によると、北アルプス焼岳の噴火で、ふもとの岐阜県吉城郡上宝村中尾部落の十七戸八十七人が避難を始めた。

噴火、地下水移動と関連か

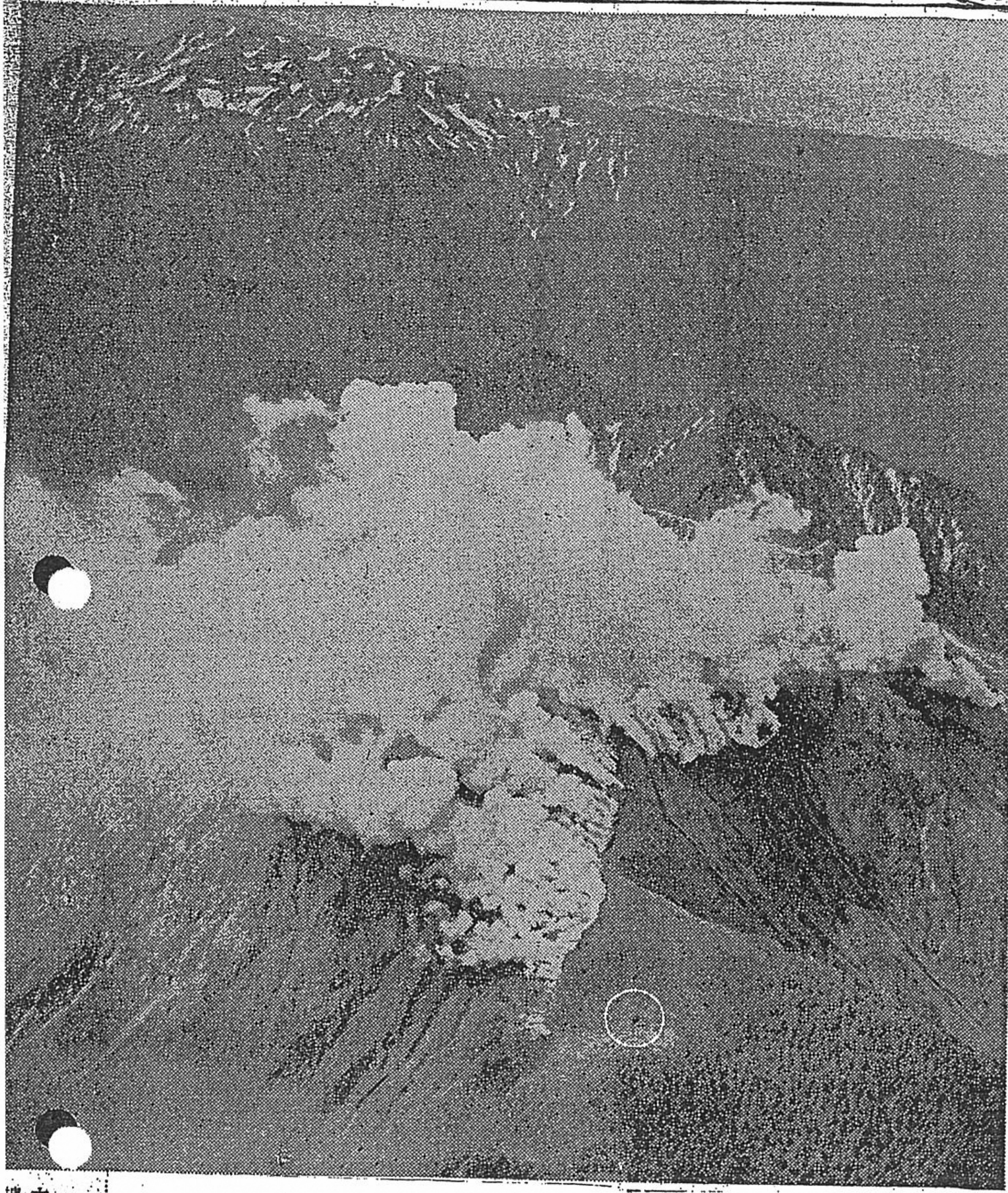
亀井信大講師の話

信大文理学部で地震学を担当する亀井節夫講師は、焼岳噴火についてつぎのように語った。

焼岳は乗鞍火山帯に属し、活火山としては、その生命は終わりにちかづいている火山だ。さいきんは、地下水の移動もあるので、こんどの噴火はこれに関連があるのではないか。浅間山とちがって、観測体制がじゅうぶんでないので、これからの噴火の予測はできないが、しばらくのあいだは危険な状態がつづくのではないかと思う。

信濃毎日新聞　昭和37年6月18日 掲載

6/19 朝
信濃毎日新聞



噴煙をふきつづけている焼岳
十八日朝本社特別機から桜井記者撮影（円内は焼岳小屋、後方の山塊は東段?）

中腹に点々噴火口

焼岳 山小屋の二人はぶじ

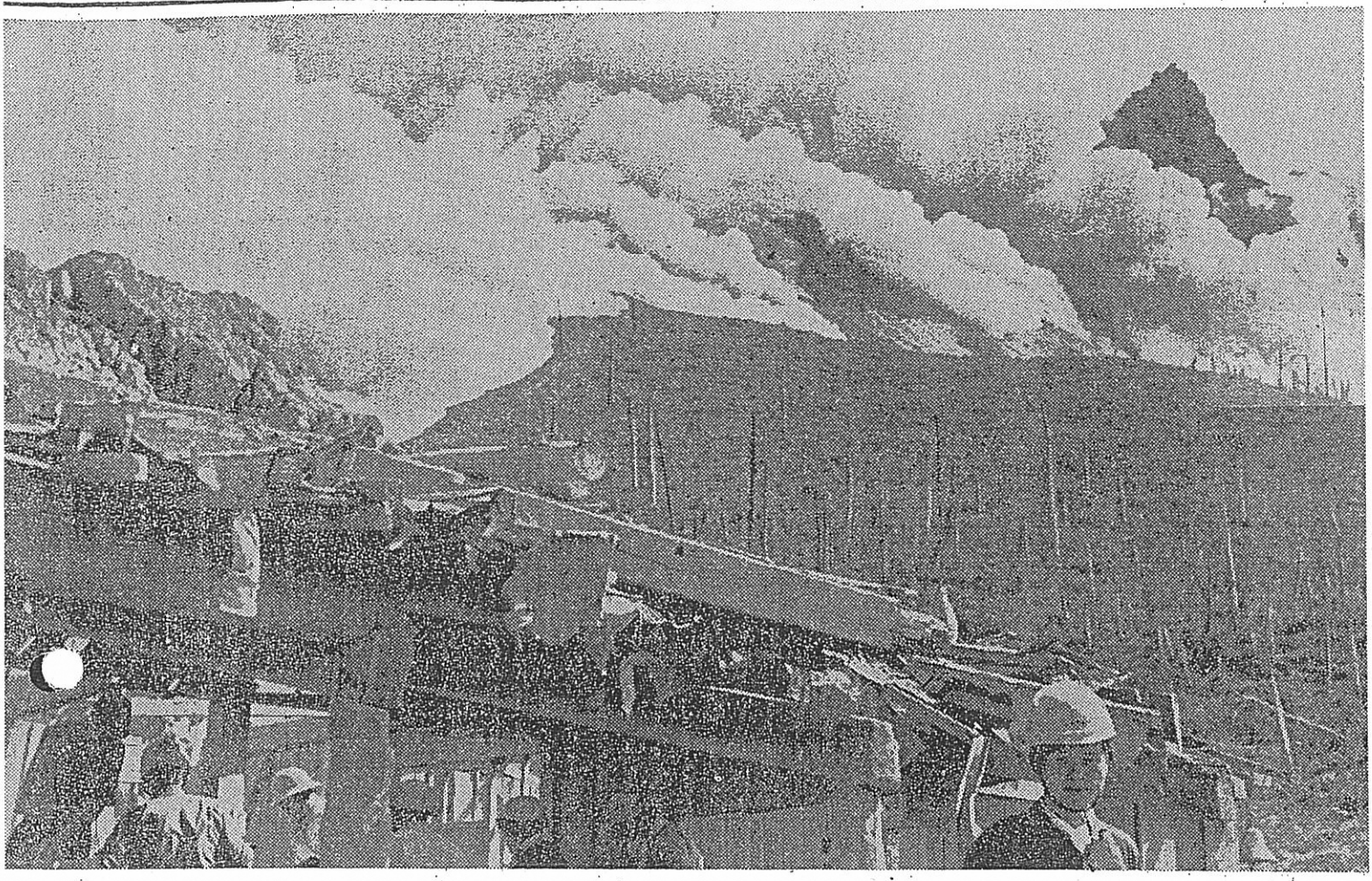
十七日夜爆発した北アルプス焼岳（標高二、四五八㍍）は、一夜あけた十八日もぶきみな鳴動と噴煙をつづけ、三十年ぶりの爆発の姿をあらあらしく露出した。安否が気づかわれていた南安曇安曇村村営の焼岳肩の小屋の従業員二人は十八日、長野県と岐阜県側でそれぞれ救出され、農作物の被害もほとんどないことがわかった。気象庁は十七日午後十一時半「北ア、焼岳の噴火は小規模」と発表したが焼岳はこの爆発で山容を一変、中腹には約二㌔にわたって点々と新しい噴火口ができ、ぶきみな鳴動をつづけながら、さかんに白煙をふきあげている。地元豊科署は十八日早朝、根橋署長らが現地調査の結果「まだ危険のため当分焼岳登山を見合わせるよう」上高地に立て看板をだすとともに、交通機関などに協力をもとめた。

焼岳の噴火は十七日午後九時五十分ごろ、同十時五十分ごろの二回おこり、頂上にちかい肩の小屋は石や灰のため原型がないほどにたたきつぶされ、建て物の内部とおもわれるあたりにはイス、ビン、カンヅメなどがくしゃくしゃにつぶれ、岩壁を利用した建て物の壁がわずかに面影をとどめているていど。

同小屋の従業員[redacted]さん（三七）、[redacted]さん（三七）＝[redacted]＝は噴火とともに消息がわからなくなったが、[redacted]さんは両足などに傷を負いながら避難しているところを十八日午前一時ごろ肩の小屋から三㌔の地点で捜索隊に救助、また、[redacted]さんも足などにケガをしながら岐阜県側の吉城郡上宝村中尾部落へ逃げのびているところを十八日昼ごろ救われた。[redacted]さんは同日午後、松本市の国立病院に収容されたが、三週間のケガ。また[redacted]さんは右足骨折と左足にヤケドをしているが、生命には別条ない。爆発した十七日、焼岳方面へは約二百人の登山者があったが、ほとんどが日中に下山、噴火が夜半におきたことがさいわいして被害を最小限にくい止めることができた。

焼岳の噴火で打ちあげられた灰は肩の小屋ふきんで一㌢ないし二㌢もつもり、さらに西風にのって十七日午後十一時ごろから安曇平、松本平にふり、十八日午前零時すぎには上小地方、佐久地方にも灰が舞った。このため五千㌶の桑園が火山灰をかぶり、各地方事務所は十八日「灰のついた桑を蚕に与えないよう」警告をだした。

信濃毎日新聞　　第三種郵便物認可



爆発でこわれた肩の小屋ふきんにも噴煙がただよう

腰まで灰に埋まる

九死に一生を得た［　］さん 箱で火山弾を防ぐ

落ちてくる火山弾をのがれ九死に一生をえた［　］さんは、収容された西穂山荘で「かんづめを入れた箱を頭にのせて火山弾を防いだ。噴火から一時間ほど小屋のなかにじっとしていたが、すごくなが く感じた。落石がおちついたところで逃げたが、どう逃げたか無我夢中だった」とつぎのように当時のもようを恐怖の表情で語った

鳴動は午後八時ごろからはじまったがたいしたことはないとおもっていた。二人ともねまきに着かえてラジオをききながら雑誌をみていたが、午後十時ごろだったろうか、突然ジェット機の爆発音を大きくしたような金属性の音がしたとおもうと小屋が上下にゆれ はじめた。一瞬〝噴火だ〟とおもい二人で勝手場に避難したが、屋根を破って石が落ちはじめたので私は物置きに逃げこみ、かんづめのはいった箱を頭の上にのせてうずくまった。このとき［　］さんは外に逃げたのではないかとおもう。一時間くらいそうしてうずくまっていたが、箱が小さいのでヒザや手などかくしきれないところに容赦なく石がおそいかかった。箱に石があたるたびに首ががくがくしたが無命にたえた。ようやく落石がおわったので逃げようとしたが腰まで岩や灰にうまってしまいもがき出るのにまたひと苦労。こうしているうちにもまた石が落ちてくるのではないかとにかく無我夢中だった。足がきかないのではいながら西穂へのりょう線へ逃げたが、捜索隊に会ったときはほんとうにうれしかった。

一夜で緑から灰色に

上高地 降灰で飲料水使えぬ

恐怖の噴火を目の前にした上高地は前夜から快晴のため焼岳の白い噴煙が夜目にもくっきりと見え、旅館の宿泊客、従業員ら 約二百人は、十八日午前三時ごろまで河童橋付近の旅館にいったん待避した従業員が夜明けとともにおそるおそる立ちもどったが、ものすごい降灰で飲料水が完全によごれ使いものにならないしまつ。また緑から灰色に景色が一変した。木木の灰はわずかな風にもあたり一面にうすまき、すべてが灰色がかった風景だ。

○…十八日朝上高地には約四十

6/10

信濃毎日新聞　昭和37年6月19日 掲載

噴煙の焼岳をゆく

ハチの巣のような小屋

杉の巨木も折れる

焼岳噴火の翌十八日早朝―。頂上ふきん、屑の小屋でゆくえ不明となった同小屋従業員■さん(当)の救出のため、警察署員ら地元捜索隊員十二人は、また火山灰がモヤのようにたちこめる登山路を、同小屋へむけて出発した。

○…上高地の焼岳登山口から約二十分で、急坂にさしかかる。登山路や、まわりの樹木には、もう一面に火山灰がつもり、ときおり吹く風に樹木にかかった灰が、パサッ、パサッ……と、音を立てて落ちる。あたりには硫黄のにおいが鼻をつき、地鳴りのような噴火の地響きがクツに伝わってくる。

捜索隊員は、■さんの安否を気づかいながら、みな無言で登坂する。

○…森林限界ちかくで、焼岳の噴煙を見あげる。ゴー音がハラをゆさぶり、灰白色の急斜面は、大いツメでかきあげたように、いたるところ窪りあがりをみせ、石の固まりが山頂へとつづく。あたり一帯は、一直径約三十―五十㌢の杉の巨木が、地上一、二㍍あたりでもぎ取ったように折れている。これらの樹木の枝や葉を埋めた火山灰は、厚さ一㍍にもたっしていようか。右側岩壁からは、降りしきる灰に誘発され、落石が無気味な音をたてている。大正池側にのびる古い火口をう(迂)回し、岩壁をよじのぼって、焼岳と西穂高岳をむすぶ"ふり"線に出る。大きな岩の固まりのむこうが屑の小屋だ。

○…岩山をまわると、すさまじい噴煙が視角をさえぎる。目のまえの屑の小屋は、柱だけを残してくずれ落ち、ひしゃげたトタン屋根は、火山弾でハチの巣のよう。つぶれた小屋を半分ほども埋める火山灰、火山弾が、十時間ほどまえの爆発のすごさと恐怖を感じさせる。かけよった捜索隊員は、ツルハシや棒で、重い火山灰をかきまわし、つぶれた柱や壁を起こして、■さんをさがした。しかし、この期の捜索では、■さんの姿を見ることはできなかった。

■さんは、六時間ほどあと、岐阜県側に逃げたのを無事みつけた屑の小屋から北に約百㍍―新しい噴火口が、穴をいくつもあけ、黒煙を吹きあげている。たちこめる硫黄のガス、火山灰のなかを噴火口ちかくにむかうと、一人ではいたたまれない無気味さが、熱気とゴー音につつまれる。ここから頂上ちかくまで約七百㍍、岐阜県側で大きな割れ目が噴煙を吹きあげて人をちかづけない。この自然の怒りが、山を愛する人びとを傷つけることのないよう祈りながら、また捜索をつづける小屋をあとにした。

はいながら下山

■さん 落石で手足に重傷

北ア焼岳の噴火で絶縁視されていた焼岳小屋の従業員■さん(当)=は、十八日午後一時ごろ重傷を負って飛騨側の岐阜県吉城郡上宝村中尾部落にたどりついた。■さんはきょう午前十時ごろ、イトコの■さん(当)=の二人で同小屋を管理するため宿泊中だったもので、同村栃尾診療所で応急手当てを受けたが、右足と両手に三カ月の重傷。■さんは恐怖の脱出行を次のように語った。

十七日午後十時ごろ携帯ラジオを聞き終わり寝ようとした。そのとたん、耳をつんざくようなものすごいひびきとともに床下が大きくゆれ、そのまま小屋がつぶされた。■君の名前を呼んだが応答がなく、どこにも見当たらなかった。あとはただ夢中で腰までつかる火山灰の中を抜け出し、夢中で山を下った。途中大きな落石に出合い、さけようとしたが右足にまともに受けてしまった。このため一時歩くことができなかったので岩陰で一時間ほど様子をみていたが次第に地鳴りが少しおさまったので、十八日午前零時ごろはいながら山を降り、中尾部落にたどりついた。

なお■さんはその後駆けつけた家人に付き添われ、同郡神岡町清水病院に行き手当てを受けたあと同五時四十分神岡発平湯に向かい十八日夜は同温泉に一泊した。

桑の被害面積は約五千ヘクタール

焼岳爆発

県農地経済部は十八日、同日午後三時現在までにわかった「焼岳爆発による農作物被害」状況を発表した。これによると降灰被害をうけたのはほとんどが桑で、被害面積は四千九百六十㌶(北佐久千七百㌶、上小千四百七十三㌶、松筑千八百九十七㌶、北安曇百七十三㌶、南安曇三百八十㌶)。同部は灰のかかった桑は養蚕にあたえないように呼びかけている。

信濃毎日新聞 昭和37年6月19日 掲載

焼岳の噴火

小林信大教授に聞く

西穂山荘ふきんから見た焼岳の噴煙

連続爆発あるまいが
山体老化で警戒必要

十七日夜の北アルプス焼岳爆発について、信大文理学部地質学教室の小林国夫教授は十八日、「爆発の内容をこれから調べるところだが、今回のは一応小規模の爆発といえる。火山活動は末期にはいっているので、こんご連続爆発の可能性はあまりないとおもうが、山体が老化しているので、じゅうぶんな警戒が必要だ」など、つぎのように語った。

語る小林教授

焼岳は老衰した火山なので、こんどのやや本格的な爆発は一般にはむしろ意外な感を与える。噴煙が四、五百尺、地震計などに前兆現象がはっきりでなかったとすれば、一応爆発は小規模のものだろう。焼岳は、乗鞍火山帯に属し、酸性の安山岩からできている火山だ。南では御岳、乗鞍岳、北にいくと焼岳、祖父岳などがある。この火山帯は、火山活動が末期にはいっており、溶岩の出方は少なくガス噴出が爆発的になりがちだ。乗鞍、御岳もガス爆発をやっておわっている。

焼岳はこれまで、明治四十五年に大爆発がおこり、それから一、二年爆発がつづいたが、大正四年には大きな爆発で溶岩が梓川をせきとめ大正池をつくった。昭和六―七年にも爆発があり、そのご、ひきつづき噴煙をあげていた。本格的な火山活動のばあいは、はっきりした前兆傾向をともなうが、今回の爆発ではっきりしなかった。

末期の火山なので、こんご本格的な大爆発がおこる可能性はあまりないといえる。しかし焼岳は山体が老化しているので、比較的小さな爆発でも山くずれをおこす危険性がかなりつよい。このさい、泥流が梓川におしよせ、おもわぬ被害を発生させないともかぎらない。泥流については、会津磐梯山が爆発で山体がくずれ、川をせきとめていまの大きな湖をつくった例もあるさっそく焼岳にいって、ガス爆発の正確な規模、火山灰の成分をしらべたり、上高地にある地震計の感受状況をみるつもりだが、このところ連続爆発には可能性を別にして、じゅうぶん注意を払う必要がある。

文□化

焼岳の噴火によせて

……近くに常時観測所がないのは遺憾……

小坂丈予

トロイデ型の山頂部

今回突然噴火した焼岳火山は、長野、岐阜両県境、北アルプスの西南端近くに位置しており、乗鞍火山群中唯一の活火山である。それゆえその怪異な山容と雄大な噴煙は"アルプスの番兵"として長年多くの登山者に親しまれて来た。焼岳は、標高は二四五八㍍あるが、約二〇〇〇㍍から上が、粘性のたかいトロイデ型の溶岩よりなる、いわゆるトロイデ型の山頂部よりなっており、いわばアルプス連峰の一角にちょこんのったような形をした火山である。

焼岳火山は今日でこそ上高地などの名勝地をそばに控え、数多くの来訪者の目にさらされ注目となっているが、昔は本邦有数の霊山地帯のしゅんけん（峻険）にはばまれて人跡未踏のありさまであったため、未開時代の噴火の状況は全くつまびらかでない。たわずかに天正二三年（一五八五年）および安政五年（一八五五年）に活動があったと伝えられるのみで、その詳細は明らかでないともかく前回の明治、大正の噴火後は一木一草もとどめぬまでに荒れはてた山頂部が、噴火以前は頂上火口内までが一面に低木におおわれており、その中には樹齢二百年をこえるハイ松もあったということから考えても、少なくとも明治四四年ごろにはいったん最盛期に達し、同年中だけでも二十二回の噴火を記録した。噴火の様相はトロイデ型火山の常のごとく、中央に大きな火口を作らず、山頂付近の各所に新爆裂火口を開いて、火山岩片や火山灰の噴出をくりかえした。このため、乳房状の山頂部は、現在でも新旧どりまぜて蜂の巣のような爆裂火口が残されている。

明治44年には22回の噴火

噴火以前数百年間は、大きな噴火はなかったものと推察されている。

近年さかのぼれる一連の噴火は、明治四〇年（一九〇七年）の末ごろから徐々に始まった。その後しだいに噴火は活発の度を増し、明治四四年ごろにはいったん最盛期に達し、同年中だけでも二十二回の噴火を記録した。噴火の様相はトロイデ型火山の常のごとく、中央に大きな火口を作らず、山頂付近の各所に新爆裂火口を開いて、火山岩片や火山灰の噴出をくりかえした。このため、乳房状の山頂部は、現在でも新旧どりまぜて蜂の巣のような爆裂火口が残されている。

噴火はその後一度衰えを見せたが、大正初期にはいるや、またまたその活動が盛んになり、大正四年六月一日（一九一五年）におこった大噴火に際しては、これにともなって発生した泥流が上高地南方において梓川をせきとめ、大正池が出現したことはあまりにも有名である。その後も焼岳はますます活発な噴火をくりかえし、大正一四年には、年間三十一回の爆発をかぞえるに至ったが、大正末期ころからその活動も漸次おとろえはじめ、昭和六―七年（一九三一―三二年）ころには噴火は全く休止の状態となり、頂上付近の噴気現象を残すのみとなった。

全く平穏だった数年間

最近数年間の焼岳は、ときどき噴気が盛んになることはあっても、表面上はまことにおだやかで、噴火最盛時五〇〇度以上もあった噴気孔の温度も年々急速にさめとろえ、昭和三四―三五年ごろには一〇〇度に達するものはほとんどなく、噴気ガスの成分も希薄であった。また頂上付近に五つある火口池の水温も全く冷たく、その成分も少ない状態であった。しかしその一方、昭和二十八年や三十三年などには鳴動をともなう小地震がしきりにおこり、この火山が地下では全く老死していないことを示していた。

このようにして、表面平穏な状況の継続は、地下において水蒸気などのエネルギーを少しずつ蓄積する結果となり、それがこのたびの突然の爆発となってあらわれたのであろう。今回の爆発は、焼岳山頂北側の斜面から、北東中尾峠の肩の小屋東方に至る延長約二㌔に近い列弧状の割れ目が一挙に開口して噴火を始めたもので、これは大正四年の大正池を生じた噴火に匹敵するもののようである。

火山性泥流の防止策を

この活動が今後どのような経過をたどるであろうかは、噴火後の現地を未踏査であり、また諸調査の結果もまだ明らかにされていない今日、また相手が活火山という大自然の天然現象であり、しかもそれが地下に起因しているものだけに、軽々しく予断をゆるさないが、現在の段階において考慮される二、三の問題について、のべてみよう。

すなわち、焼岳のような安山岩よりなる火山は、玄武岩でできた大島三原山やハワイのキラウエア火山のように、おだやかな溶岩の流出や、火山弾の噴出をおこなう噴火のタイプと異なり、浅間山や桜島と同じくはげしい噴火をともなう爆裂型の火山である。しかしこの火山のような活動も未期に近い、衰えた山では、あらためて新溶岩を強力に噴火することはおこりにくく、それよりはむしろこの若返化した火山体の一部が噴火とともに泥流と化しやすいので、その直接の被害、ならびにこれにともなう洪水の発生をじゅうぶん注意する必要がある。

また活火山の噴火の予知は困難ではあるが決して不可能ではない。しかし、それには長期にわたる不断の精密な観測によって、その火山の基礎的な性質をつかまなければならない。その点、焼岳のごとく著名な観光地にある活火山でありながら、近くに一つの常時観測所ももたないことは、はなはだ遺憾なことといわざるをえない。

さらに火山噴火のさい、適当な防護設備や非常訓練がわれわれを危険から救ってくれる場合も多いと考えられる。前記の観測施設の増強や、火山性泥流を防ぐ砂防工事の促進なども、広い意味で同じ効果を期待できよう。

わが国の風光明美な地域は、たいてい火山地形が関係あるものといわれている。また活火山はさらにこれに動きと色の変化をあたえてくれる。このせっかくの美しいが危険な観賞物を、ただいたずらに警戒しすぎるのも、また不当に軽視するのも考えものである。これら火山の地元では恒久的な火山対策を講じることによって、登山者の安全を確保し、その納得をうるようにつとめ、また登山者は科学的根拠にもとづいた安全と危険の限界を、ひとりひとりがじゅうぶんみとめて行動してこそ、はじめて火山は決して恐ろしいものでなくなり、その美しさと雄姿をしたわれる存在となるであろう。

（東京工大助手＝地球化学専攻、長年焼岳について研究している）

……焼岳の断面図……

信濃毎日新聞

信濃毎日新聞　昭和37年6月20日 掲載

再爆発の可能性も

諏訪気象庁調査官語る　常時観測体制が必要

諏訪氏

十七日夜爆発後、いぜん噴煙をつづけているる焼岳について、気象庁地震課調査官諏訪彰氏は十九日夜、東京大手町の気象庁で「こんど再爆発の可能性もあり、じゅうぶん警戒する必要がある」とつぎのように語った。

焼岳は気象庁としていつ爆発するかといった観測をしていなかったが、こんど同じような爆発があってもおかしくはない山で、警戒していくべき山だ。溶岩の質からみると、粘りっぽいもので、浅間山のようによく爆発する山と違う。爆発はもぐらが大地をもぐって頭を出すような形で、北海道の昭和新山（昭和十九年爆発）や明神礁（昭和二十七年爆発）と同じような鐘状火山だ。こういう火山で、しかも焼岳のように老衰期にあるものは火山活動の間隔が長い。このため底に流れた溶岩が冷えかたまり、火道をふさぐので、新しい火道をつくって爆発する。こうしたときはとくに激しい爆発をおこし、福島県の磐梯山のように山体の三分の二をふきとばし、裏磐梯をつくるような大爆発をおこすこともある。

焼岳は明治末期から活動をおこし、大正のはじめに大爆発して大正池をつくり、昭和十四年ころまで活動をつづけていた。その後、静穏期にはいっていたわけだ。こんどの爆発で活動期にはいったかどうかは、科学的にくわしく調べないとわからないから、なんとも言えないが、じゅうぶん注意して見守らなければならない。近年ではカムチャツカのベズイミアンという山やニューギニアのラミングトンという山がこれと似た火山で、いずれも爆発しており、頂上を数百㍍ふきとばしている。

老衰期の火山は一般も油断し、研究機関も常時観測しないため、無防備状態にあるから、爆発したときは想像以上の被害をもたらす。こんどの爆発を契機にこれを念頭において地元も研究機関も注意したい。焼岳の爆発予知はやってできないことはない。現在の火山学を活用すれば予知できると思っている。しかしこれにはふもとに観測所をおいて、たえず観測するとともに、すぐれた観測者がいてデータをとり調べることが必要だ。火山観測は昭和三十年度を初年度とし、浅間山、桜島など十三の火山について観測整備五ヵ年計画をたて、観測していくことになった。しかし、焼岳はこの中にはいっていない。こんど爆発の危険性もあることだから、こんどのことを契機に、県などはもっと真剣に対策を考え、気象庁などへ働きかけ、常時観測をするような体制をととのえていく必要があろう。

上空からみた焼岳＝右方水があるのは旧噴火口、左下噴煙の末端あたりに焼岳小屋がある（18日撮影）

信濃毎日新聞　昭和37年6月20日 掲載

毎日新聞　昭和37年(1962年)6月20日　(水曜日)　6版

焼岳、いぜん活動つづく

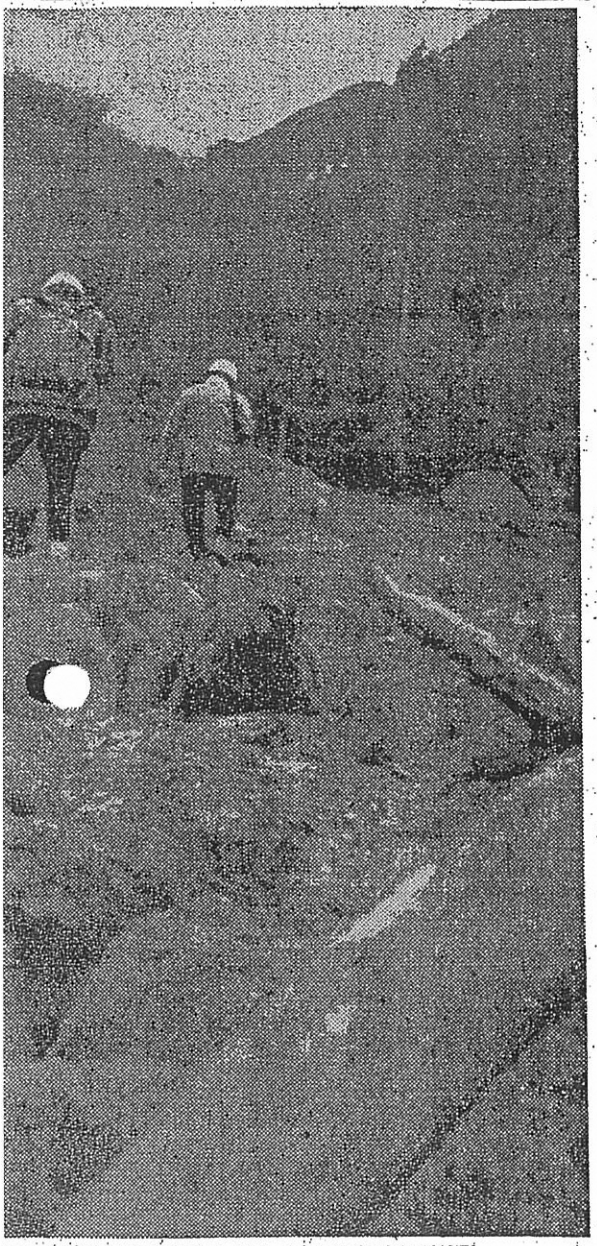
二回にわたり爆音

泥流、大正池に押し出す

北アルプス焼岳は十九日午後、また二回にわたり爆音をだした。一方、泥流が大正池に押し出しており、十七日夜の爆発いらい、焼岳はいぜん無気味な活動をつづけている。これにたいし松本測候所は「高山測候所から〝空気振動を観測した〟との連絡はあったが、噴煙、降灰をともなっていないので再爆発とはいえない」といっており、同日午後三時、こんどの爆発がなくはないとして、登山はやめるように警告を発した。

相変わらず鳴動をつづける焼岳で十九日午後二時ごろ突然「ドーン」という空気をゆるがす爆音が二回断続してきこえた。上高地の人たちの話では、十七日夜の爆発のときの音より大きかった"という。しかし新しい噴火がおこったようすもなく、また降灰もないうえ西穂山荘から出た偵察隊の話でも変わりないということで、新たな爆発かどうかはまだわかっていない。

上高地ではこの日朝から鳴動もやや小さくなり、白煙の量も減ったと落ち着きをとりもどしかけた矢先だけに、人々は驚いて戸外に飛び出し焼岳をみつめていた。焼岳にちかい大正池旅館の話では爆発音と同時に焼岳の上上堀沢を白煙が大正池に向かってくだりはじめたという。このため一時は上上堀沢のかなり下の方に新しい噴火口ができたといううわさもひろがり、ますます不安をました。しかし上上堀沢はこの日午後、突然上から押し出した土砂立方メートルを越える推定されるおびただしい泥流でうまり、一部大正池に流れこんでいるので、そのさいの気流の影響から白煙が沢にそって下降したものと思われ、そのこ



とともに上上堀沢におし出した泥流（下湯沢付近）

べたところでも新しい噴火口はできていない。

ところで、この泥流は十八日午前から焼岳屑の小屋東側約八十メートルにある噴火口付近から上上堀沢をつたわって七、八十メートルほどの長さで流れていたが、十九日には日い蒸気をまき上げて流れているので、火口付近では相当高い温度だと推測される。

なお、十九日午後、岐阜県高山市高山測候所から松本測候所に「十九日午後二時九分、同二時十八分、同四時二十分の三回空気振動を記録した。焼岳はいぜん活動をつづけている」と連絡があった。松本測候所がこれにもとづいて上高地にある東京電力霞沢発電所大正池取り入れ口の委託観測所に問い合わせた結果、振動を感じ、噴煙のほか、石などの流出を認めたことがわかった。

〝登山を見合わせよ〟

松本測候所が警告だす

松本測候所は十九日午後三時、焼岳に関する情報を発表、「こんども爆発がないとはいえないので登山はしないよう」警告した。要旨つぎのとおり。

焼岳は十七日の爆発後もときどき鳴動をともない噴煙を上げており、噴煙の高さは三百メートルくらいに達している。こんどの爆発の見おもは現在のところ不確実だが、過去の事例をみると、明治四十年から大正五年にかけて小爆発を繰り返し、末期に大爆発し、また大正十一年から昭和七年までは小爆発を繰り返している。こんども爆発する可能性はたぶんにある。登山者が多いときはかなりの被害も考えられるので、登山は当分しないように注意してほしい。

またこんどの爆発で多量の降灰があり、山頂周辺で十センチくらい、上高地付近で五ミリ内外、中ノ湯付近で二ミリ未満だったので、これらが泥流となって流れるおそれがある。いま梅雨は中休み状態にあるが、十日中ごろふたたび梅雨もようの天気になるとみこみなので、一度大雨があると一面に降った灰が泥流となって流れをせきとめたり、流れを変えたり、またいったんとめられた水が一度に流れ出ることが考えられる。降雨時には上高地一帯も梓川流域にはしゅうぶんな警戒をしてもらいたい。

小林信大教授らきょう焼岳へ

信大文理学部地質学教室の小林国夫教授、百瀬寛一助手、東大地震研究所小諸支所の村井勇所長ら一行は、北アルプス焼岳爆発の原因、こんどの爆発の可能性などを調査するため、きょう二十日午前八時半松本市を出発、焼岳にむかう。◇

東大地震研究所は平賀、宮崎、鈴木、村井の四所員を焼岳に派遣、二十日から現場調査をはじめる。これは焼岳爆発で地震がおこっているかどうか、おこっていればその個所でおこっているか、など焼岳の数カ所に地震計をセットし詳細な調査をするもの。また、同所火山物理学担当の水上武教授もちかく現場に行き調査活動の指導をする。

信濃毎日新聞　昭和37年6月20日 掲載

焼岳調査始める

東大地震研究所員ら

焼岳の鳴動は二十日朝からようやくおさまり、吹き上げる白煙もぐっとすくなくなった。この日上高地には小林国夫信大教授ら文理学部地学教室関係者約十人が現地調査に、また東大地震研究所員三人が焼岳地震観測にくるなど、学術調査団が相ついで入山した。小林教授らは焼岳火口付近まで登り、途中上堀沢の泥流や火山灰をあつめるなどの調査で着手。一方、東大地震研究所員は上高地の中ノ湯に地震計を設置、ついで上堀沢の上部ほか六ヵ所にも設置の予定で準備をすすめている。いずれも十日間以上の長期的な観測をおこなうもようで①再び噴火があるかどうか②その規模はどうか③またその時期の予知④噴火の性質—などについてそれぞれの立ち場から研究する。

信濃毎日新聞　昭和37年6月21日 掲載

焼岳の動静に注意

信大小林教授に聞く 火山灰分布も調査

信大文理学部 地学 教室の小林国夫教授は二十日、焼岳噴火口付近まで登り、泥流や火山灰、火山弾の状況を調べたが、こんどの噴火をどうみるか、再噴火はあるか―などについて、つぎのように一問一答をおこなった。この中で同教授は「おおくの観光客があつまる上高地をひかえていることでもあり、こんどの焼岳の動静について多方面から徹底的に調べる必要がある」と強調している。

―どういった点を中心に調べるのか―

答え 学生をしばらくの間常駐させて噴火の動静をみると同時に、さしあたり私の研究部門の関係から火山灰を調べるつもりだ。火山灰の粒度や、分布状況を調査し、爆発の規模を測定したい。どのくらいの範囲に灰が飛び散っているか、その粒の大きさはどうか、あるいは火山弾の重さと飛んだ距離を調べることで爆発時の火山弾の速度などが算出され、噴火の規模がはっきりするわけだ。また私の専門であるローム層といまの火山灰のちがいも研究したい。

―こんどの噴火をどうみるか―

答え 焼岳の地質は硅酸度が高く、粘性が強い。このため震度がはげしく噴火までの圧力もかなり強いので、前兆もかなりけんちょだ。あるていど事前に察知できるはずだ。しかし焼岳は一般に、かなり老化した火山とされ、大きな噴火がないと思われていたので、なんらの予報措置もとられていなかったようだ。噴火の規模としてはそう大きなものではないと思う。火山弾がそんなに飛んだようすもない。

―硅酸度が高く粘性が強いとどうなるのか―

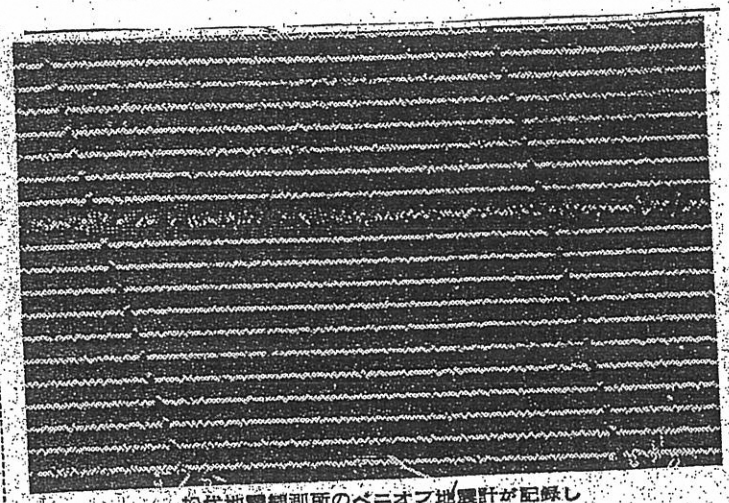
答え このばあい窓ぎわがかたまりやすく、ちょうど噴火口にセンをしたような状態になり、内部に圧力が蓄積されるので前兆もけんちょなわけだ。だから爆発も相当大きくなることもあり、山が弱ければ山自体が吹き飛んでしまうこともある。

―すると焼岳の噴火はこんどおそろしいばあいが考えられるか―

答え それはこんど地質やガスの成分をくわしく調べなければわからない。しかし東大地震研究所で地震計による観測をするということだし、この観測でひんぱんに地震が察知され、その期間がだんだんみじかくなるようだと、いちおうちかく噴火があるものとみて注意しなければならないだろう。

―泥流で梓川がせきとめられるのではないかという不安があるがどうか―

答え くわしく調査しなければはっきりはいえないが、いまのところ噴出した火山灰が流れているだけなので、これ以上大量にふえるとは思えない。しかしさらに噴火がつづき、火山灰がもっと噴出するようなことになるとたいへんだ。泥流をおこす水がどこから出ているのかもこんど調べたい。



松代地震観測所のペニオフ地震計が記録した北アルプス焼岳爆発による地震波（南西動）

焼岳爆発の地震波を記録

松代地震観測所

十七日夜起きた北アルプス焼岳の爆発による地震の波を気象庁の松代地震観測所の地震計が捕え、フィルムの上にはっきり記録していることがわかった。

同観測所の調べだと、同夜九時五十六分から約五分間にわたって短い周期の地震を捕えるための各種地震計が爆発の波を断続的に記録した。写真の地震波は、実際の震動を約十万倍に拡大してみせる電磁式のペニオフ地震計がフィルムに記録した東西動の地震波。かなり激しくゆれていて、爆発のすさまじさを物語る。また、約三万倍に拡大する短周期上下動地震計も、かすかに波を捕えている。

これらはいずれも、爆発と同時に衝撃的に発生する短周期の地震波で、その後にゆったり伝わってくる長周期の地震波はほとんど記録されなかった。このことから同観測所は、爆発が地表面にちかいところで起こったもので、地震波としてはエネルギーの推定も容易でないほど微少なものといっている。浅間山の爆発とくらべても、おそらく半分ていどの規模だろうと推定している。

信濃毎日新聞　昭和37年6月21日 掲載

信濃毎日新聞　昭和37年(1962年)6月24日　(日曜日)

週間のニュース

まだ去らぬ不安
〝寝耳に水〟の焼岳の噴火

記者のノートから

30年ぶりの中噴火

◇…北アルプス焼岳(二、四五八㍍)が十七日夜三十年ぶりに噴火した。焼岳にちかい大正池旅館の話だと、午後十時ごろ地軸をゆるがす鳴動とともに噴火をはじめ、原子雲のようなキノコ型の噴煙が、五百㍍も上空に達したという。肩の小屋付近の標高約二千百㍍の地点に、長さ約一㌔にわたって裂めがはいり、さかんに噴煙をはき続ける割れ目噴火だった。さいわいガス爆発で溶岩の噴出もなく、規模も中ていどだったため火山弾が五百㍍ほど飛んだだけ。肩の小屋にいた管理人ふたりがケガをしたほかは大きな被害はなかった。しかし、爆発と同時に大量の火山灰が降りそそいだ上高地は、一時は視界をまったくうばわれ、不安と緊張につつまれた。大正池ふきんの旅館、東京電力取り入れ口社宅の人たち約十人は着のみ着のままで約三㌔はなれた小梨平に避難したが、どこまで逃げても続く降灰とイオウのにおいに女性などは泣きだすさわぎ。また小梨平、中ノ瀬には観光客約二百人がいたが、逃げる場所もなく「一時はもうダメだと観念した」という人もあったほどだ。

管理人ふたり救出

◇…噴火したとき焼岳肩の小屋には、[redacted]さん(三五)=[redacted]、[redacted]さん(三五)=[redacted]=のふたりが管理のためはいっていたが、すぐ捜索隊を出した焼岳とりょう線つづきの西穂山荘、村上守さん(五四)らの適切な処置で、約四時間後にまず[redacted]さんが救出された。[redacted]さんは、カンヅメのはいった箱をかぶって火山弾をのがれたと、恐怖の一瞬を語っていたが、この救出は不安におののく、上高地の人たちに、明るさをもたらした。しかし[redacted]さんは、その後地元消防団らが、まださかんに鳴動をつづけ白煙をふきあげる焼岳に決死の捜索をおこなったが、十八日正午をすぎても消息は知れなかった。人間の頭ほどもある火山弾がちらばり、生木は折られ、イオウのにおいのたちこめる現場のようすから、ようやく絶望視されかかったとき、県警を通じて、無事、岐阜県側に下山しているとの連絡がはいり、村営ホテルに設けられた救助対策本部からはよろこびの歓声があがった。

流言飛語乱れとぶ

◇…焼岳の噴火は、文献によると天正年間に大爆発があったと記録され、それ以後、大正十四年ころまで活動がはげしかった。とくに大正四年の噴火では泥流が梓川の流れをせきとめ、いまの大正池ができた。昭和にはいってからは七年、十年、十四年、二十八年、三十四年と火山活動が活発となったが、七年をのぞいては鳴動ていどの小規模のもので、こんどの噴火は、規模からいって七年いらい三十年ぶりのものだった。七年の噴火のさいは、まだバスが開通してなく、徳本峠を越えて上高地へはいった時代で、いまほど観光地として発達してはいなかった。このため、かなり古い山小屋や旅館の主人でも、この噴火をみたものは少ない。それだけに、たとえ中規模とはいっても、焼岳の噴火をこんどはじめてみる人がほとんどだった。地軸をゆるがす鳴動と天を突く噴煙にはすっかりおどろいたわけで「焼岳の小屋には二十人くらいの登山客がいる」とか「岐阜県側には真っ赤な溶岩が流れだしている」などの流言飛語が乱れとび、かけつけた警察や地元消防団、報道陣をあわてさせた一幕もあった。

三日間、降灰で灰色一色に塗りつぶされた上高地も、二十一日の雨でふたたび緑をとりもどした。鳴動もやみ、わずかにのぼる噴煙が、恐怖の一瞬を思わせるだけとなったが、上高地の人たちの不安は、まださらない。「このままおさまるのなら、焼岳の白煙は上高地に趣をそえ、かえって客があつまる」と抜け目のないところをみせているものの、年間三十万人以上もの観光客をあずかる地元として、こんどすこしでも危険があるということなら、万全の予報措置をしてほしい―というわけだ。火山灰が泥流となって上上堀沢を埋め、一部が大正池にそそぎこんだこともこんご梓川の流れをせきとめ、上高地が浸水するのではないかとの新たな不安をいだかせる原因をつくっている。

予報施設の設置要望

◇…老朽火山とされ、大きな危険はないとされていただけに、こんどの噴火は、専門家の間ではあるていど〝寝耳に水〟だったようだ。『噴火といっても水蒸気が若干出るていどだ』といわれ、日本でも五指にあげられる観光地でありながら、なんらの観測施設もなかった。噴火が、シーズンにはまだ間があり、しかも、夜中だったからよかったものの、これがシーズン中だったら、一日に数百、数千人の人たちが登る焼岳だけに大惨事になっただろう。焼岳は、硅酸度がつよいという地質の上から予報がしやすいという。このため地元は万全の予報施設の設置をつよくのぞんでいる。東大地震研究所や信大文理学部地学教室などの学術調査団ものりこみ、①再び噴火はあるか ②その規模はどうか ③噴火の性質―などについて調査をはじめているので、ちかくこれらの結論が出されるが、もし、こんごも噴火の危険性があるとしたら、多くの観光客のためにも、できるだけ早く、観測所の設置をのぞみたいところだ。

〝焼岳〟小爆発　危険をおかして火口付近を調べる信大調査班(6月20日)

信濃毎日新聞　昭和37年6月24日 掲載

6/27 信毎

摂氏92―93度を記録

信大文理学部で測定 焼岳爆裂口の温度

三十年ぶりで噴火した焼岳は、その後鳴動もなく静けさを続けているが、焼岳の調査をしている信大文理学部地学教室は、二十六日、熱電流計で爆裂口の温度を測定した。その結果、摂氏九十二度から九十三度を記録したが、これは昭和七年の噴火時の二百七十五度にくらべはるかに低く、また二十八年の鳴動があったときの九十四度にくらべても低い。結局、噴気に関するかぎり、焼岳は、しだいに衰微の傾向があることがわかったが、こんごも噴火があるとしたばあい、その規模を推定するには、さらに噴出しているガスの分析をおこなう必要があると、同教室ではしている。

焼岳については、このほか東大地震研究所でも、上堀沢の湯沢出合い付近など六ヵ所に地震計をすえ、本格的観測をはじめているが、二十一日から二十六日までに焼岳自体の震動はみられていない。このように、いまのところ焼岳自体は静かだが、噴火にともなう泥流の流出がはげしく、上堀沢上流では、二十日流出したときにくらべ二十六日は十数倍の泥流に埋まっている。二十六日の信大地学教室の調査では、爆裂口から、砂礫以外の白濁の泥流が流れ出し、上堀沢にそそいでいるので、このままでは、ちかく大量の泥流が大正池に流れこむ危険性もあるとみており、地元南安曇安曇村や上高地の旅館業者の間で早急に砂防工事をするよう陳情書にのぞむ声が高まっている。

信濃毎日新聞　昭和37年6月27日 掲載

6/29 信毎

水上教授(東大)も参加

〝焼岳爆発〟を調査研究

爆発して焼岳を学術的な立ち場から調査するため、東大地震研究所火山物理学担当の水上武教授は、二十八日夕上高地に入山、四日間の予定で上高地の安曇村村営ホテルを基地に調査をはじめた。二十八日夜は噴火直後、すでに同村営ホテルに観測機械を設置して地震観測をつづけている東大地震研究所員とこれまでの観測データを検討したが、こんどの調査でかなりくわしい観測結果が得られる見通しである。

水上教授の調査は、焼岳の噴火活動を通じて噴火が引き起こすがきをどのようにしてふせぐかの手がかりをえ、あわせて学術研究をしようというのがねらいである。おもな調査内容は▽噴火山と地震との関係から現在観測している地震がどのていどの深さにあるのか、深さと エネルギー源との関係▽火山活動はとんとも活発につづくか▽噴火の規模はどのていどで、その力は危険度の高いものか▽流出する泥流が山ろくに与える影響はどうかなど。

これまでの地震計によるデータとどんどんにおこなう焼岳の現地調査結果を総合して調査研究の結論を出すことにしている。

水上教授の話 焼岳は昭和二十八年に人体に感じられるほどの地震があり、いまとおなじ東大地震研究会員らと二、三ヵ月間長期滞在して調査したことがあるだけに、こんどの噴火活動と地震との関係は強い関心を寄せている。いまのところ噴火の規模とか、こんごの危険性などについて、はっきりしたことはいえないが近日中にかなり具体的な観測結果を出すことができると思う。

地震計を調べる水上教授(向こう側)

信濃毎日新聞　昭和37年6月29日 掲載

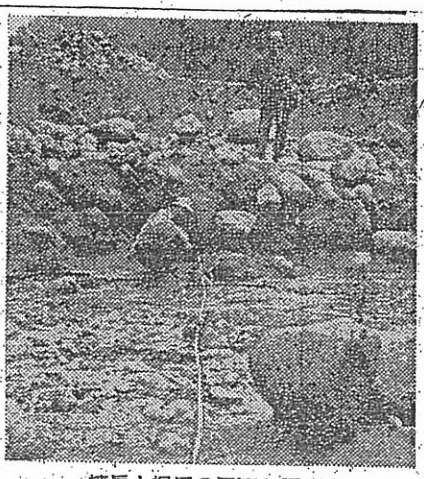
6/30 信毎

噴火による〝泥流〟

焼岳上堀沢の土砂　水上教授が確認

二十八日夕刻、上高地に入山した東大地震研究所水上武教授は、二十九日焼岳山ろくの地質につき、焼岳上堀沢、上上堀沢の実地調査をした。この結果、これまでたんに土砂の流出といわれてきた上堀沢は、噴火にともなう流出物をまじえた泥流であると結論、この泥流がここ数日間ひじょうに活発な流れとなって大正池下の梓川を完全にせきとめている事実を確認した。

この泥流は、大正池に面した焼岳山頂付近から西側に約一・五〝の長さでのびている。幅は途中では四、五十㍍だが、梓川付近では百数十㍍になり、さる二十二日ごろから大正池の東京電力霞沢発電所取水口下の梓川の流れをせきとめ、二十九日朝は厚さ四、五㍍の泥流が水の流れを完全にせきとめた。このため、東京電力では、泥流が取水口をうめるおそれがあるとして、連日ブルドーザーでたい積した泥流を掘り下げており、二十九日正午すぎには泥流の上をわずかな水がかよいはじめた。



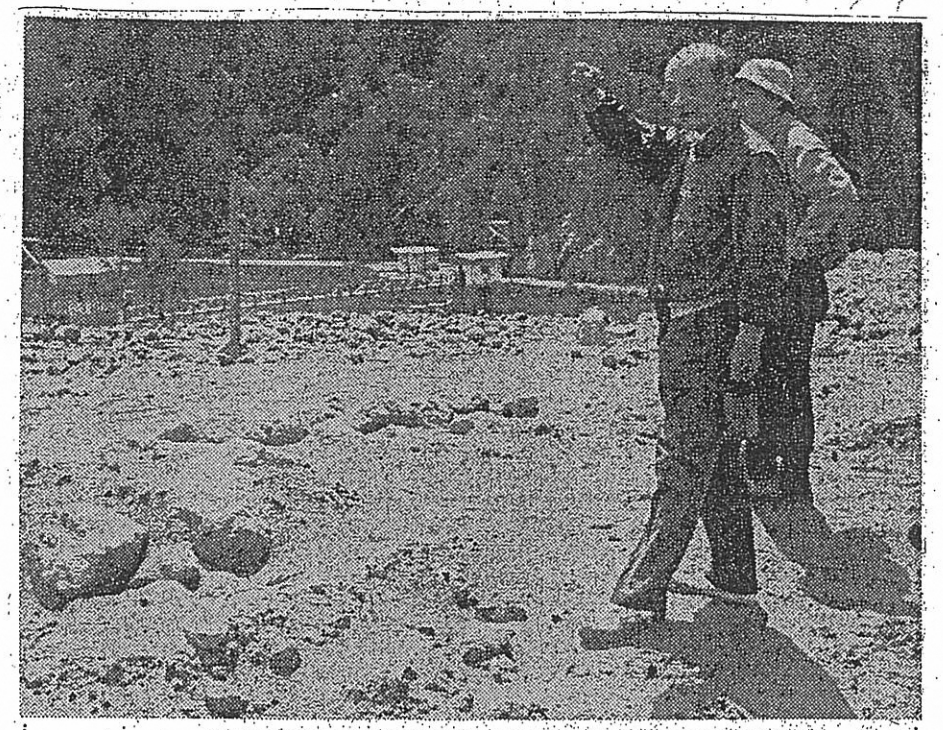
焼岳上堀沢の泥流を調査する水上教授(向こう側)ら

水上教授によると、この泥流は、焼岳山頂から梓川に達する上堀沢が、急斜面のため、火口付近の流出物と大量の降灰がわずかな雨でも、ドロドロのコンクリート状になって流れだしているものという。こんども沢にそった大きな石や土砂、立木をまきこんでかなりの量が梓川にそそぐのではないかとみられる。

また、上上堀沢についても、規模のひじょうに大きな泥流が大正池にそそいでいることを確認したが、いずれも泥流の源一帯がもろい火山岩と灰なので、梓川への大量の流出が気づかわれている。

信濃毎日新聞　昭和37年6月30日 掲載

7/1 信毎



焼岳の泥流を調べる水上教授＝大正池の東電取水口付近

近い将来大爆発の危険ない

焼岳・水上教授語る

二十八日から北アに高地で、焼岳噴火後の現地調査をしていた東大地震研究所水上武教授は、三十日夜いったん下山し帰京したが、下山前、上高地安曇村・村営ホテルで、これまでの観測結果について「ちかい将来、とくに大爆発をおこすようなことはないと思う」とつぎのように語った。

▽きる十七日夜の噴火後、焼岳山ろく、明神池一帯にかけて八ヵ所で地震計による地下振動の観測をしてきたが、それによると焼岳がちかいうちにとくに大きな爆発をおこすきざしはみえない。しかし、だからといって大爆発がまったくないということではなく、どんなこともいろいろな方法で観測をつづける必要はあるだろう。

▽焼岳の噴火口は、頂上から少し岐阜県側に下がったところを約一〇〇㍍もの線状になってつづいており、めずらしいかたちのものだ。噴火口縁上に、弱いキレツ面があり、この部分が内側の圧力で噴き出したものだろう。焼岳は火山としては老化しており、溶岩が流れ出すようなことは考えられない。しかし、おおぜいの人がくりこむ観光地なので、常時観測の体制がしかれればなによりだと思う。

▽泥流はかなり規模の大きなもので、こんども雨のたびにはげしく流れ、梓川にそそぐと思う。大正池一帯には、かなりの影響をおよぼすのではないか。

信濃毎日新聞　昭和37年7月1日 掲載

焼岳の泥流 梓川をせきとめる

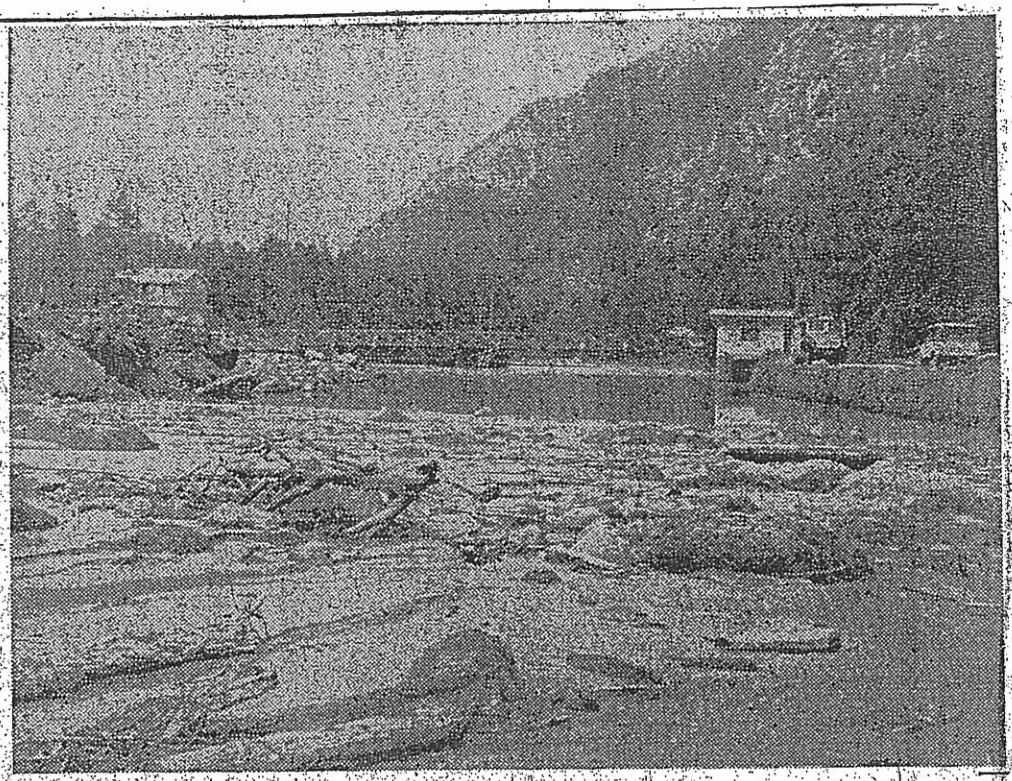
焼岳の泥流は、ここ数日来の雨のため岩石をまきえて上高地から上高地大正池の東京電力霞沢発電所えん堤ふさんの梓川に押しだし、五日には川をせきとめた。松本建設事務所はこのままだと大正池がはんらんするおそれがあるとみて、六日、現地を調査、緊急対策をたてることになった。

東電松本電力所の話によると、梓川におしだした泥流は、一万立方㍍にのぼり、霞沢発電所えん堤のすぐ下から長さ百㍍にわたって約三十㍍の川幅を埋めている。累積した泥流は、水面から四㍍あった県主要地方道上高地公園線とすれすれになり、さらに高さ三・九㍍の発電所えん堤もせきとめられた水の中に流れんだ。

せきとめられた水は、いまのところ発電所側の調整非水トンネルで非水できているので、支障はないが、泥流がさらに押しだしたり、降雨量がふえると非水トンネルだけでは水をのみ切れなくなり、大正池がはんらん、災害がおきる危険があるという。このため松本建設事務所はブルドーザーなどで、とりあえず水が流れるていどのみぞをつくり、この間、建設省と協議のうえ、本格的な対策をたてる準備をすすめている。

7/6 信毎

信濃毎日新聞　昭和37年7月6日 掲載



泥流でうまった東電黒沢発電所えん堤ふもんの梓川

焼岳泥流、大正池へも

松本建設事務所 近く取りのぞき作業

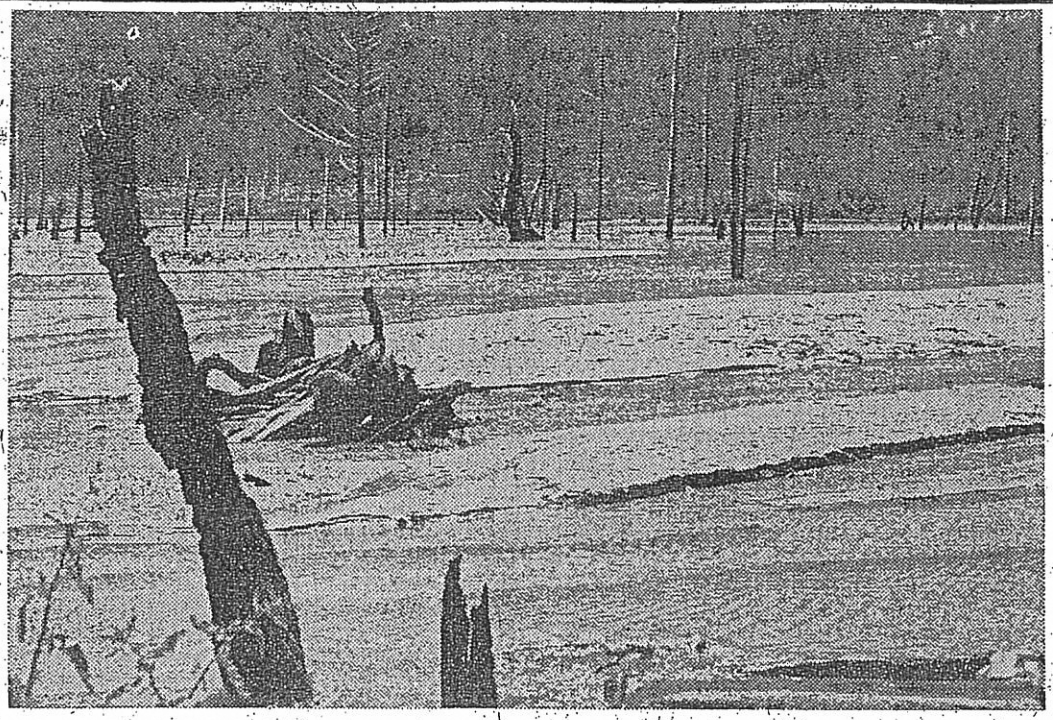
松本建設事務所は六日、焼岳の泥流でせきとめられた上高地大正池の東電黒沢発電所えん堤ふもんの梓川一帯を現地調査した。この結果、上堀沢から一、二キロあまり上流の上堀沢から押しだしていた泥流もここ数日来の雨で大正池へはいり、このためすでに池の水位が一メートルほど上昇していることがあきらかになった。同建設事務所はこのままだと池があふれて災害をまねくおそれがあるとして九日からひとまず、せきとめられた水をはく水路を泥流が累積している梓川に掘り、ひきつづき本格的な泥流をとりのぞく作業にかかることをきめた。

現場はひと雨ごとにようすが変わり、東電黒沢発電所えん堤のすぐ下から長さ百メートルにわたり、約三十メートルの川幅が泥流にうまった梓川には、五、六回目の雨でまた新しい泥流がかぶさった。せきとめられた水は、あるていど発電所側の調整排水トンネルで、泥流累積地帯の地下をくぐり、一キロほど下流の梓川に放出されているので、いまのところ問題は少ない。

松本建設事務所は、泥流のとりのぞき作業に大型機械を使いたい考えだが、上高地線登トンネル（延長五百十五メートル、幅三メートルないし五メートル）の幅がせまいため、機械を現場に搬入することがむずかしく、対策に頭を痛めている。

7/7 信毎

信濃毎日新聞　昭和37年7月7日 掲載



小さくなってゆく大正池

小さくなった上高地の大正池

焼岳の泥流が流入

治水に影響　来月から緊急工事

中部山岳国立公園・上高地の「大正池」は、うちつづく雨で焼岳の泥流がはいり、小さくなっている。大正四年に焼岳が爆発してできたころ二十数万平方㍍もあったのが、そのころの土砂流入ですでに二十万平方㍍を割っている矢さきだけに、建設省信濃川水系砂防工事事務所は信濃川水系の治山治水に与える影響も大きいと頭を痛めている。この結果、総予算三十億円で大がかりな国営砂防工事をおこなう年次計画をたて、とりあえず緊急工事として来月から工費八千九百万円で土砂どめ施設を急ぐ準備をいそいでいる。

東京電力松本電力所の調べによると、同電力が昭和三年秋、梓川貯沢発電所設置にともなう取り入れ口を大正池につくったころ、二十三万平方㍍だったものが、さいきんは十九万平方㍍に縮小した。このあおりをうけて、ひところ六十五万立方㍍にのぼっていた貯水量もいまではわずか十六万立方㍍に減った。しかし、こんどの焼岳爆発で面積、貯水量ともさらにけずられる公算が大きい。

このため建設省信濃川水系砂防工事事務所は昭和六十年ごろまでの長期年次計画で焼岳の山腹を走る上上堀沢、上堀沢、中堀沢、下堀沢を中心に三十余基の土砂どめえん堤とこれにともなう床固めなどの施設を完備することになった。今年度は、さきごろの焼岳爆発にともなう緊急工事として上上堀沢に砂どめえん堤、床固め工各二基、また上堀沢には砂どめえん堤一基をつくる方針で、このほど建設省へ認可の手続きをとった。

こんどの焼岳の爆発による泥流は上堀沢を押しだして大正池のすぐ下から長さ百㍍にわたって梓川をせきとめ、（せきとめられた水は大正池にある発電所調整排水トンネルで排水しているため、いまのところ支障はない）ほか、それより一㌔ほど上流の上堀沢にも泥流が押しだして数日前から大正池へはいるようになった。

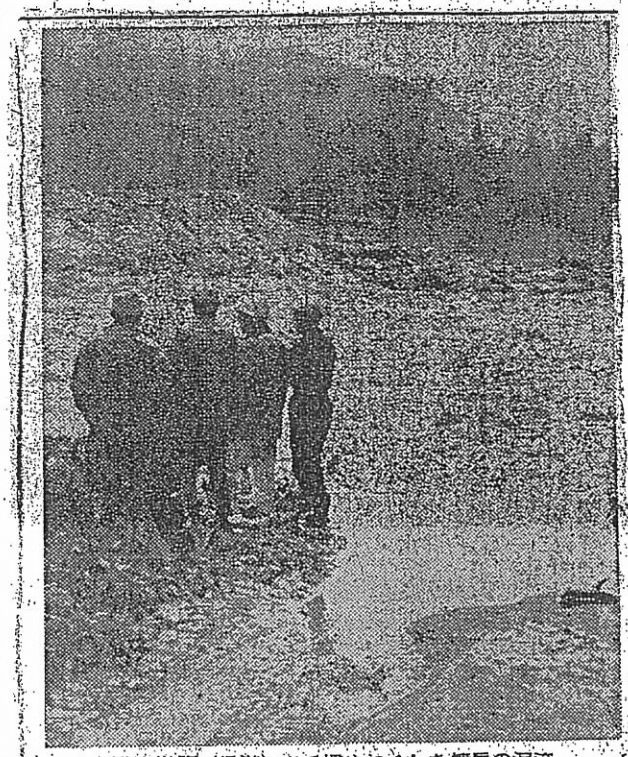
建設省信濃川水系砂防工事事務所東京電力松本電力所の話だと、ことに上上堀沢に累積している泥流の量は四、五十万立方㍍にのぼりこんどの豪雨などでどんどん大正池へなだれ込む可能性がつよく、ばあいによっては大正池が上上堀沢からの泥流で"ヒョウタン形"に変わるか、あるいは中断されて新しい池・昭和池（仮称）ができる気配があるといっている。

信濃毎日新聞　昭和37年7月10日 掲載

泥流、県道も埋める

ハイカー、一時カン詰め

上高地



自動車道路（県道）まで埋めつくした焼岳の泥流

北アルプス焼岳は十二日早朝、小爆発をおこしたが、この爆発の震動による影響と朝から降りつづいた雨で、午後三時ごろから、上堀沢の泥流がまた上高地大正池の東京電力霞沢発電所えん堤ふきんの梓川に押しだし梓川について対岸の県道上高地公園線も埋没、不通となった。

現場ふきんの梓川は今月初旬からすでに長さ百㍍にわたって岩石まじりの泥流でうまり流れをせきとめていたが、この日押しだした新しい泥流は梓川をのり越えて県道を約三十㍍も埋め、道路上の泥流は深いところで一・五㍍も累積した。このため松本電鉄、おんたけ交通、濃飛各社のバスはストップ、約八百人のハイカーが一時、上高地に カン詰めとなったが、松本電鉄バスは午後二時五十分松本発から現場で折りかえし運転をはじめている。

上高地は同夜もつづいて雨が降っているので、松本建設事務所はブルドーザーによる復旧作業もできず、天候の回復をまってあすなう予定。

上高地から帰りをいそぐ一部の観光客は、不通となった道路近くの山を高巻きしてバスに乗りつぎ下山しているが、傾斜が急ですべりやすいため、上高地旅館組合ではロープをはったり、高まき道路の整備にのりだしている。東電霞沢発電所では大正池の水を調整排水トンネルから排水しているので、大正池の水がはんらんする心配はいまのところないが、上堀沢から一㌔ほど上流の土上堀沢の泥流が大正池にどんどんはいるようになれば、上高地に水があふれる危険性が大きいので、地元では早急に砂防対策を講ずるよう県や建設省にのぞんでいる。

焼岳が小爆発

十二日午前五時三十分ごろ焼岳が鳴動とともに小爆発をおこし、かなりの灰を上高地一帯に降らせた。鳴動は約十分間つづいてやんだ。この日上高地一帯は大雨のため、約四百人の観光客はこの爆発に気がつかず、混乱もなかった。

焼岳付近の大正池旅館の話 たいした爆発ではなかったが、かなりの鳴動とともに雨にまじってすこし灰が降った。この前の半分にもおよばないものだが、ガスが濃く焼岳がみえないので、きっぱりようすがわからない。

中ノ湯、坂巻温泉の湯量などかわる

焼岳爆発の影響か北ア焼岳ふもとの中ノ湯、坂巻温泉（南安曇安曇村）などで、爆発の影響か二、三日まえから湯量がかわったり、湯温があがるなどの現象があった。焼岳は十二日に小爆発したことから、温泉関係者などはその前兆だったのではないかとみている。

焼岳南側にある中ノ湯温泉（経営者小林物晶さん）では十日ごろからゆう出するお湯の量が三分の二ほどに減り、野天ブロのお湯はほとんどなくなった。湯温もそれまで八十度だったのが九十度ちかくにあがった。中ノ湯から約三㌔離れた坂巻温泉（経営者上松きよ江さん）でも十一日夕方から湯量がかなりふえ、温度も三、四度くらいあがった。しかしいずれも地震などの前兆はなく、豪雨のためか十二日の爆発にはまったく気がつかなかったという。

7/13 信毎

信濃毎日新聞　昭和37年7月13日 掲載

一人が爆風でケガ

焼岳小噴火

九日午前九時十分ごろ、北アルプス焼岳が小噴火した。松本測候所にはいった報告によると、午前九時十分ごろから約三分間にわたって爆動がつづき、ふもとの上高地一帯にはうっすらと灰が降った。焼岳の小噴火は十四日ぶり。

◇　◇

九日朝の焼岳小噴火で、登山禁止の立て札を無視して登っていた二人の登山者が爆風にあい、重傷を負った。

この二人は、[redacted]、会社員[redacted]さん(三〇)と、同市大門通り一条北入る、新潟大二年生[redacted]さん(二)で、小噴火のあった九時十分ごろ焼岳小屋ふきんで爆風にあい、飛んで来た石にあたって[redacted]さんは全身打撲で三週間、[redacted]さんは頭に一週間のケガをした。

ケガをした[redacted]さんの話　ごう音と爆風があって間もなく、大きな石がくずれ落ち、小石が降ってきた。灰やガスにまかれ、石にかられを打たれたときは「もうダメだ…」と思った。登山禁止の立て札を気にしなかったのがわるかったと思っている。

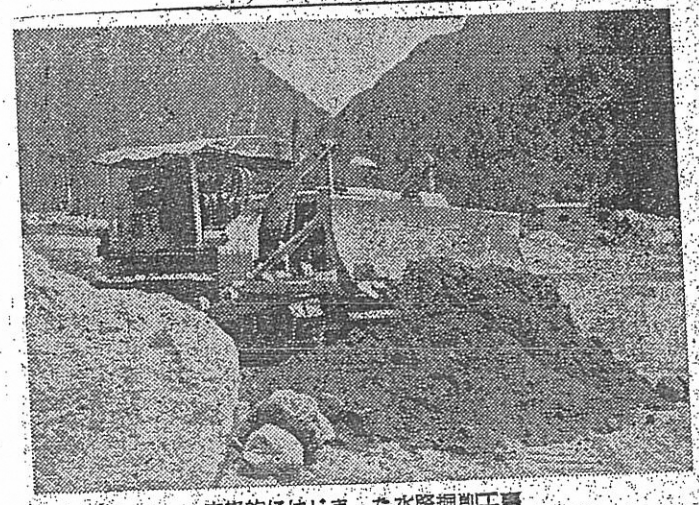
信濃毎日新聞　昭和37年8月10日 掲載

氷はけ水路の掘削はじまる

焼岳の泥流対策工事

焼岳の爆発で上高地の梓川を埋めた泥流対策は、ようやく軌道にのり〝排泥路〟の設置について、せきとめた水をはく水路の掘削工事が台風シーズンを前に十二日から本格的にはじまった。

泥流で梓川が埋まったのは上高地大正池の東京電力霞沢発電所えん堤のすぐ下から約二百㍍。



本格的にはじまった水路掘削工事

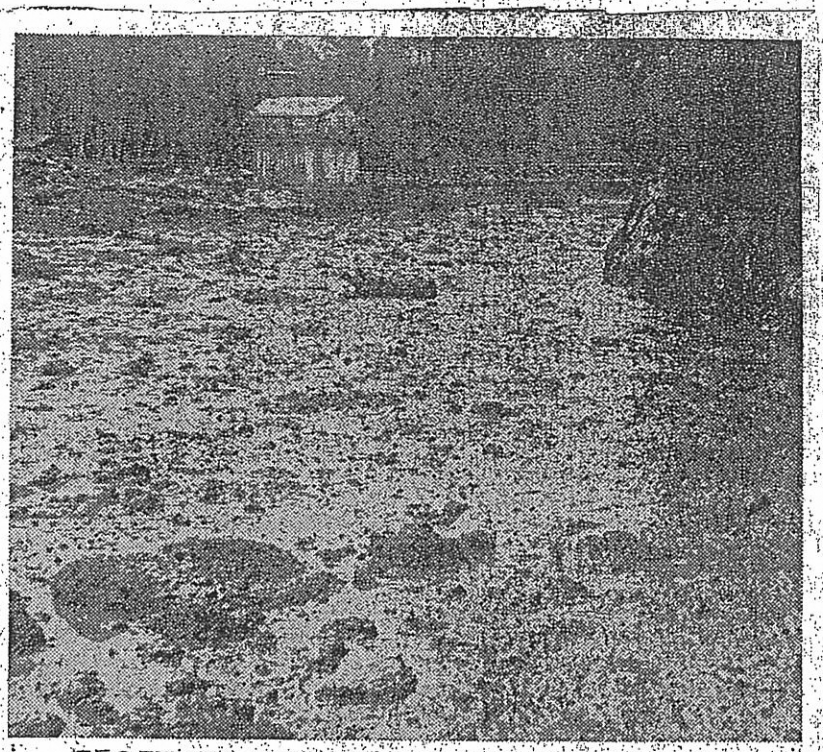
このあたりの川幅はかつて三十㍍ほどあったが、建設事務所が建設省防災課と協議した結果、埋めた泥流を全部取り除くことは困難だとし、深さ三㍍、幅十㍍の水路をこの部分に掘る方法を採用し、九月中旬までに完成させることにきまった。

大正池はこのため水位がいまも一㍍ほどあがっているが、発電所側の調整放水トンネルで泥流累積地帯付近の地下をくぐらせて一㌔ほど下流の梓川に放出しているため、いまのところ問題はない。

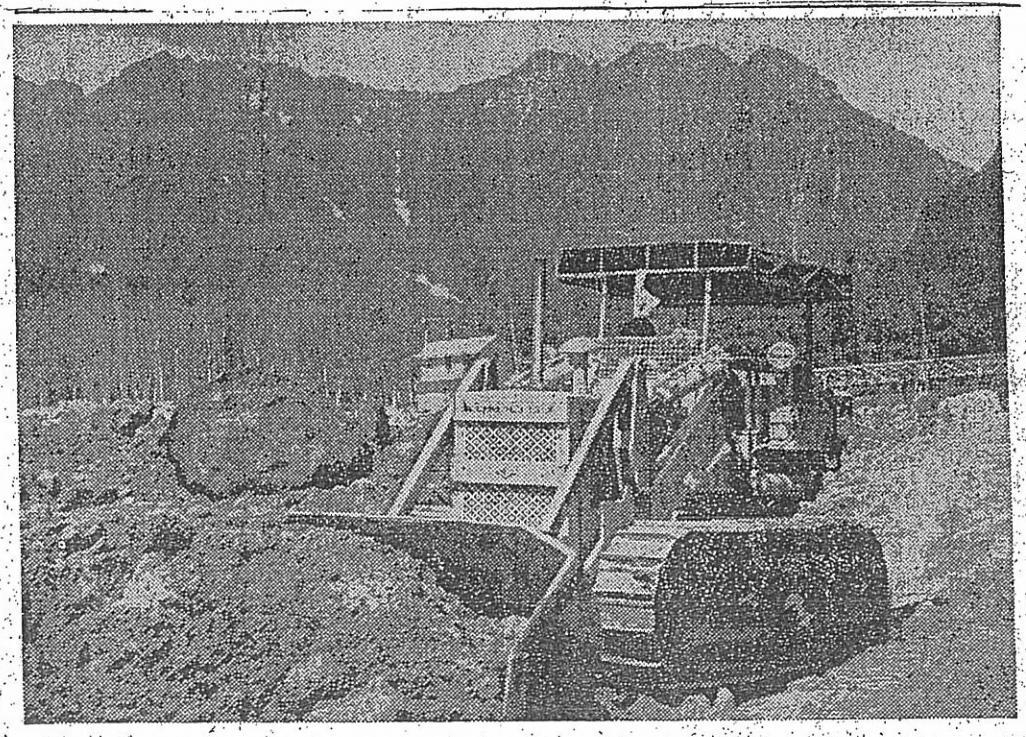
すでにできあがった排水路は、こんご焼岳の上堀沢から押し出す泥流を安全なところへ誘導することをねらいに、水路掘削工事現場のすぐ近くにつくったもので長さ百㍍、深さ五㍍、幅十㍍となっている。

高級清酒 神渡 ミクダリ 麻谷 豊島屋

信濃毎日新聞　昭和37年8月13日 掲載



焼岳の泥流で埋まった県道上高地公園線（東電霞沢発電所取入口付近）



はじまった泥流の取り除き作業

上高地で緊急防災工事始む

"非泥路"などつくる

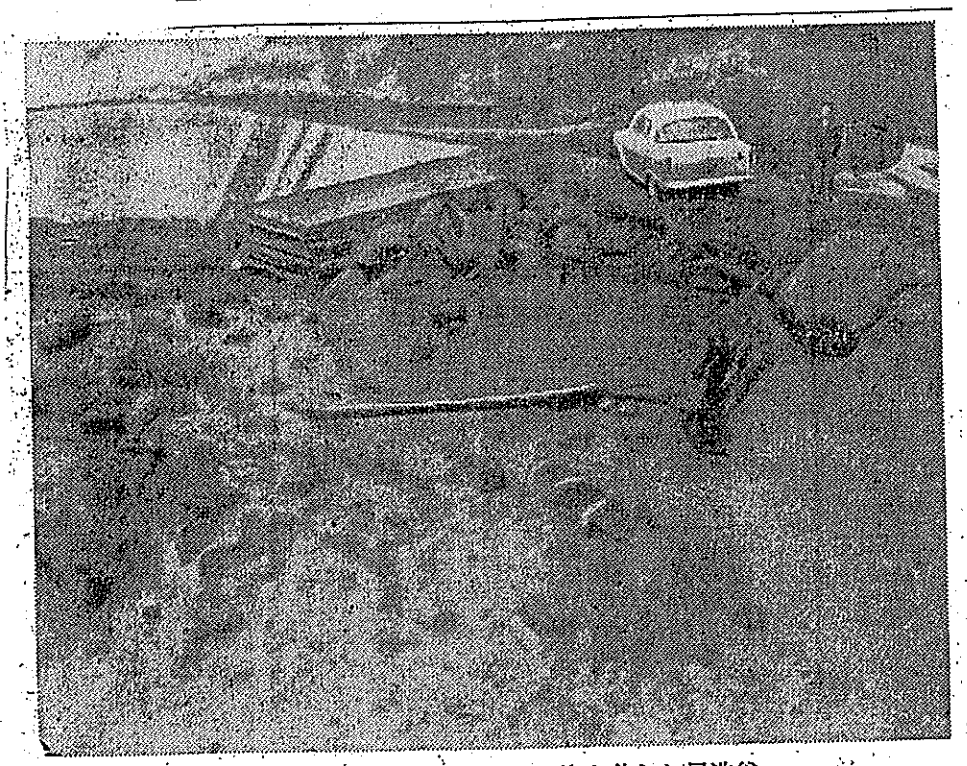
松本建設事務所は、焼岳の泥流で被害をだした上高地大正池ふきんの県道上高地公園線と梓川にたいし、十四日から予算八百万円で緊急防災工事をはじめた。

工事の内容は、①県道上高地公園線の泥流が累積した部分を中心に、長さ百㍍にわたって土砂をつみ上げ、路面を二㍍高くする。②泥流にうまった梓川の川底を整理し、増水している大正池をはきだす水路約百五十㍍を開設する。③泥流が押しだしている上堀沢には、新しくおしだしてくる泥流を被害の少ない梓川下流へ誘導するため、延長百㍍ほどの"非泥路"をつくるーの三つ。

十四日からはじまった工事は路面のかさあげが主体で、他のふたつの工事は建設省の了解を得てから本格的に着手する方針である。

8/15 信

信濃毎日新聞　昭和37年8月15日 掲載



雨で流れ出した噴出物でドロ海と化した足洗谷

岐阜県側はドロ海

焼岳また爆発 雨で噴出物流れ

【中尾＝岐阜県】焼岳は十八日夜から十九日未明にかけて、またも小規模な爆発があり、多量の火山灰や土砂などをふき上げた。しかも十九日朝、山で雨が降ったため、斜面に積もった噴出物がどっと岐阜県側の足洗谷あしあらいたに)に流れ出し、清冽な水が流れている。雨は夜が明けるころあがり、水もふえなくなった。

押出された噴出物はどろどろのセメントのようで、岐阜県吉城郡上宝村中尾地区の上流にある建設省の砂防エン堤・事現場付近は一面のどろ海、工事中のエン堤近くには高さ二メートルほどの大きな石が上流から流されてころがり、工事用の仮橋が流された。

地元の人たちの話では「雨量はそうひどくないのに、こんな被害が出るのは、どろどろの火山灰が押し流したのではないかといい、大雨になったら、もっと大きな被害が出るのではないかと新しい不安を感じている。

上高地は降灰やむ

【松本】十九日朝の上高地は、小雨模様で焼岳はまた噴煙が続いているが、降灰は朝方からやんだ。灰色に包まれていた上高地も前夜来の雨で緑が七分通りよみがえり、上高地を訪れる観光客も平常通り続いている。

"長くはつづかぬ"

村井理博の話

【松本】北アルプス焼岳の噴火活動を調べるため、東大地震研究所村井勇理博と平賀、宮崎両技官は二十日上高地にはいり、地震計などをすえつけ観測をする。主なねらいは大噴火がこんどの一回だけでおさまるか、続いて起るかをみるためで、数日後には観測の結果から今後の動きがかなり分かるというが、村井理博は十九日松本で次のように語った。

焼岳の噴火はいままでの例でいずれも短期間あるいは一度だけでおさまっている。したがってこんどもそんなに長く続くとは思えない。焼岳は、噴煙を流し出すような火山ではないので、上高地の旅館などに直接被害は与えないが、噴火と同時に水を多量にふき出すため泥土を押流し、大規模なものは川までせき止める。大正四年の噴火で大正池をつくったのがその例だ。

盛んな噴煙つづく 焼岳

焼岳は十九日になっても盛んに噴煙を高く上げていた。上高地の人たちはもうすっかり平静さを取戻し、旅館では火山灰でザラザラになった部屋や廊下の掃除をしていた。この日松本からはいった観光客は約二千人で、噴火をわざわざみにきた人もあり、河童橋付近はカメラの列が並んで、火山灰がもっとも降った大正池付近は木もササも道路も灰に汚れたままだが、釜トンネルから下流は前夜の雨で汚れを洗し、緑も美しさを取戻した。同日もまた小爆発があって話題を呼んだ。

道に大きな穴

上高地線道路が十九日午前十一時ごろ長雨のため、前川渡付近で真径六十㌢ほどぽっかり穴があき、このためバスは一時不通になった。

5/20 朝日

毎日新聞　1962年6月21日付掲載

焼岳噴火 観測活動始まる

信大、東大地震研など

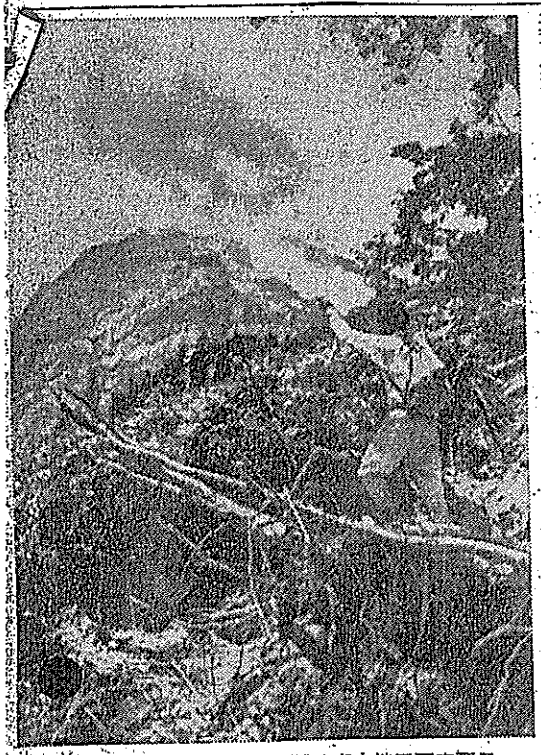
噴煙をあげつづける北アルプス焼岳の火山観測のため二十日東大地震研究所、信大などの観測調査班が上高地にはいり、活動を始めた。十九日午後再び三回にわたって爆発、高熱の泥流を大正池に向かって押し出した焼岳はその後爆発もなく噴煙もやや少なくなったが依然として鳴動している。

夏山シーズンをひかえこの〝怒る焼岳〟に科学のメスを入れるため二十日朝、東大地震研究所宮崎、平賀、鈴木の三技官が電子地震計八台など観測器材を積んだ車で上高地にはいり、安曇郡安曇村営ホテルを本部にして焼岳山ろくに地震計を配置、観測を始めた。同地震研究所村井理博も地質面の調査で入山、信大地質学教室小林国夫教授を主任とする調査班もはいった。

○…火山灰一色にぬりつぶされていた上高地にもようやく山の緑がよみがえり二十日は快晴、上高地の住民もほっと一息の表情。新名所、噴煙見物の登山客の姿も見られる。

○…ハイキングコースの照明はまだ火バチの灰をふりまいたような火山灰でよごれ一雨ほしいところだが、雨になると焼岳では十分も積った灰がどっと大正池に押し出す危険もあるという。

宮崎技官の話　約三週間の予定で地震観測を行ない爆発後の活動、今後の状態を調べる。水上主任教授は二十五日ごろ上高地にはいるが、それまでに各観的な資料を集めたい。



焼岳山ろくで測定器の線を張る東大地震研究所員

毎日新聞 1962年6月20日付掲載

焼岳の爆発続く

6/20 毎日

【上高地で柳本、田中記者】十七日夜、爆発した北アルプス焼岳は、二晩過ぎた十九日も相変わらず噴煙を吹き上げ、鳴動を続けているが、同日午後二時十分ごろ再びかなりの爆発が二回あり、上高地の人たちは戸外へ飛び出すほどだった。

大正池からみると噴火口の一番下方の岳沢（登山道）付近からかっ色の溶岩か泥流らしいものが、長さ四、五百メートル幅で数十メートルにわたり大正池に向って流れ出している。

松本測候所で注意報

【松本】松本測候所は十九日午後「焼岳の爆発は今後も続くので登山はしないよう。また降雨で積もった灰が泥流となって河川の流れを変えたり、鉄砲水になる恐れがある」と注意報を出した。

観測班、現地に出発

【小諸】東大地震研究所平賀士郎、宮崎勤郎両技官は火山観測を行なうため十九日、浅間山にある浅間火山観測所から電子地震計八台を持って現地に向かった。

信州大でも

【松本】信州大学文理学部地質学教室では十日、小林国夫教授ほか職員五人、学生数人の調査班を送る。

信州大学地質学教室・小林国夫教授の話　二十日東大地震研究所員村井勇理博とともに現地に行くが、また爆発したとなると噴火口の地質に大きな変化が生じているものと思う。この分ではまだ爆発はつづくだろう。

すさまじい泥流

十九日午後の爆発で、流れ出した流動物は泥流らしいが、現場近くにいた沢田屋主省国立公園管理員はつぎのように語った。

ゴオーッというゴウ音がしたとたん、焼岳小屋付近から黒い流動物があふれ出し、見る間に直径五、六尺の大石がゴロゴロ動き出し、直径七、八寸の大木もメリメリ押し倒された。無気味な動物のようにはい出した泥流のようなものは蛇のよう。

正面ルートの登山路にそって岳沢に音を立てて巻き込み、約千六百尺ほど沢一ぱいの幅に流れて大正池にかかるところでとまった。それ以来、噴火口から聞こえていた鳴動はピタリとやみ、ただ煙が出ているだけだった。

昭和３７年６月１８日　月曜日

（１）　１１版　明治25年３月31日第三種郵便物認可（昭和35年１月13日国鉄特別扱承認新聞紙第103号）　岐阜日日新聞

創刊８３年
発行所
岐阜日日新聞社
岐阜市今小町９
電話 代表 岐阜②5151番
© 岐阜日日新聞社 1962

北ア焼岳が爆発

中尾部落17戸など避難

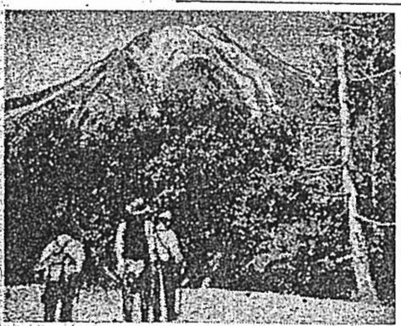
【上高地】北アルプス焼岳は午後九時五十分ごろ、ものすごいゴウ音とともに噴火、頂上から黒い煙がふき出した。上高地辺では火柱は見えなかった。午後十一時なお焼と灰が上高地の夜空いっぱいに広がっている。この日上高地から焼岳方面への登山者は約二百人。ほとんどが同日中に下山したが、焼岳小屋、西穂小屋には約二十人が泊まっているもよう。とくに頂上付近の焼岳小屋には従業員二人が泊まっており、同夜地元安曇村消防団員ら二十人の救助隊が現地に向かった。

【岐阜】岐阜県警本部にはいった情報によると、十七日午後九時五十分ごろ、北アルプス焼岳（標高二四五八メートル）が地響きを立てて噴火した。このためふもとの吉城郡上宝村中尾部落の十七戸八十七人が避難を始めた。

県側への降灰なし

【飛騨】高山市内では爆発時刻に高山測候所で異常音響を観測したほかは異常はなかったが、平湯峠付近からは焼岳山頂付近でが立ちのぼるようすが確認できた。山頂から約四・二キロの吉城郡上宝村中尾部落で強い地響きが続き、焼岳はもうもうと白煙を吹き上げ火炎が空をこがしているのがはっきりと見られた。火山灰は西風のため岐阜県側へは降らなかった。

帝国ホテル管理人村木殖さん（北ア遭難救助隊長）の話　ゴオッという地鳴りと爆発音に驚いて外へとび出すと、キノコ雲が上がり見る間に高さ数百メートルになった。間もなく手すくさい黒いガスがいっぱいにひろがってきたので、なにも見えなかった。灰が降り始めたがいぜん地鳴りと鳴動が続いている。爆発した位置は溶岩の火も見えないし、噴煙の出た場所からみて中腹で、岐阜県側とみている。私が上高地にはいってから昭和六年まで小爆発が続いたが、こんな爆発は初めてだ。


爆発を起こした焼岳

小爆発と発表

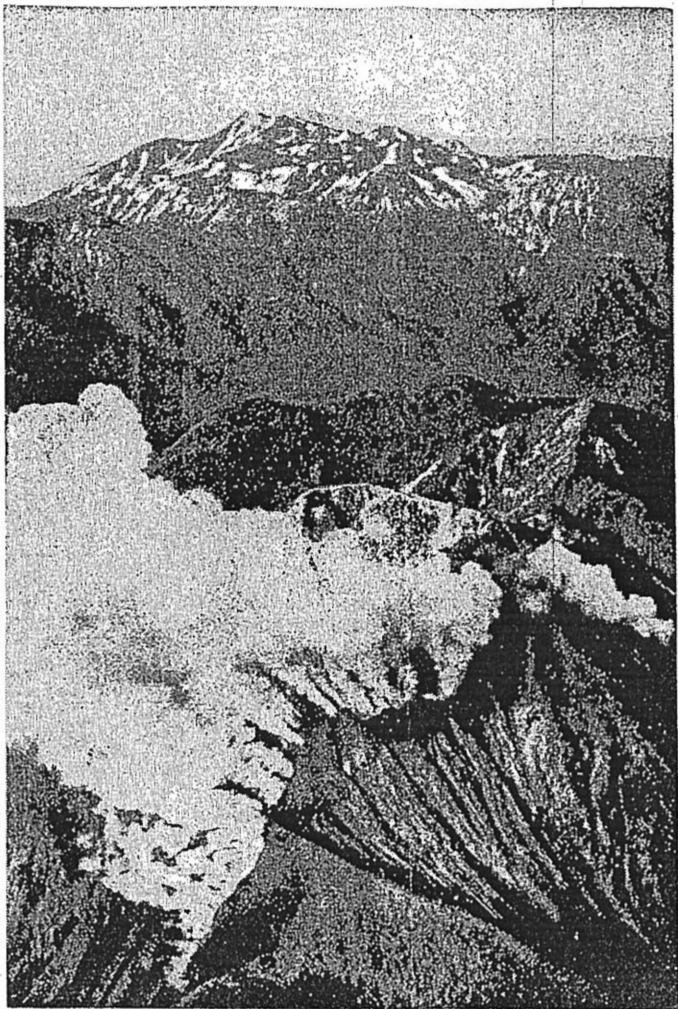
気象庁予報部は十七日午後十一時半「北ア、焼岳が十七日午後九時五十五分小爆発を起こし上高地、大正池付近に一―三ミリの降灰があり、その後噴煙を吐き続けているが被害はないもよう」と発表した。

▽焼岳（二四五八メートル）＝日本アルプスでただ一つの活火山として有名。明治いらいたびたび爆発してきたが、大正四年六月六日大爆発を起こし泥の流れを押し出し、梓川をせき止めて現在の大正池をつくった。その後は休止状態を続け大正池、田代池と並んで上高地をめぐる美しい風物となっている。頂上には大きな噴火口はなく、三つの小噴火口を中心として白煙を吹いていた。

岐阜日日新聞　昭和３７年６月１８日付掲載（現岐阜新聞）

岐阜日日新聞（夕刊）　昭和37年6月18日　月曜日

岐阜日日新聞 夕刊



爆発し噴煙あげる焼岳。後方は雪をいだくは乗鞍岳（共同特別機から）

岐阜日日新聞　昭和３７年６月１８日付掲載（現岐阜新聞）

共同通信社配信

小屋の二人助かる

焼岳爆発　降灰でかすむ上高地

【上高地】十七日夜北アルプス焼岳（標高二、四五八㍍）が昭和七年いらい三十年ぶりに噴火、焼岳小屋にいた二人の従業員のうち一人は負傷、他の一人も助かった。（関連記事三面に）

一夜明けた焼岳は上高地の旅館の話によると、朝方まで続いていた鳴動は午前九時現在やんだが、降灰は続いており、白煙が西風に乗って長野県側に流れている。山の天気は晴れているが上高地一帯は降灰でかすみ、どんよりと曇っている。十七日焼岳方面への登山者は約二百人だったが、ほとんどが同日中に下山しており、登山者への被害はなかった。

しかし焼岳小屋にいた作業員二人のうち長野県[redacted]さん[redacted]は爆発と同時に寝間着のまま尾根づたいに逃げたため西穂小屋の村上守さんら五人の救助隊に救い出されたが、足、頭などにケガをした。また消息不明の[redacted]さん[redacted]は生存が危ぶまれていたが、吉城上宝村穂尾で救助された。

こんどの焼岳の爆発について信大文理学部地質学担当の亀井節夫講師は「今後しばらくの間は危険な状態が続くのではないかと思う」と警告を発している。

【長野】十七日夜上高地大正池にある長野地方気象台の委託気象観測所からの報告によると、北ア焼岳の爆発は同日午後九時五十五分で、鳴動とともに噴煙が四百㍍から五百㍍上がった。溶岩、火山弾は確認できず、また爆発の規模もわからない。上高地には爆発後一時間余で二、三ミリの降灰があった。

なおこの爆発による噴煙は松本から見えたが、爆発直後の震動は松本測候所の地震計に記録されなかった。

【松本】焼岳に最も近い北アルプス西穂高岳の西穂小屋経営者、村上守さんから資料者への連絡によると、噴火したのは焼岳南西側の休火口とみられ、これで岐阜県側に新火口ができたもよう。上高地の旅館などの話によると「ゴウ」という地鳴りとともに耳をつんざく爆発音が聞こえ、間もなく黒いガスが上高地一帯をおおい、灰が降り出した。六軒の旅館には従業員のほか観光客など約百人がいるが、一時はどこへ避難するかと大騒ぎだった。

焼岳の噴火で打ち上げられた灰は、午後十一時ごろ、西風に乗って松本平にも降り始め、南安曇郡安曇村中ノ湯、島々あたりでは灰で真っ暗になり、外を歩く人の顔が真っ白になった。松本市内には十八日午前零時ごろから灰が降り出した。

避難民もかえる

【岐阜】焼岳から四㌔離れた登山口の岐阜県吉城郡上宝村中尾部落の十七戸八十七人のうち約二十人は、爆発と同時に同部落から約二㌔離れた同村蒲田部落へ避難した。しかし十八日午前零時すぎ噴煙がややおさまったので部落に帰った。神岡署栃尾巡査部長派出所の佐藤部長の話によると、岐阜県側には溶岩や灰は全然降っていない。

焼岳とは

▽焼岳（二、四五八㍍）＝岐阜、長野県境にある珍しい角状活火山。御岳火山帯に属し、日本アルプスでただ一つの活火山として有名。明治いらいたびたび爆発、大正四年六月六日の大爆発では泥の流れを押し出し、梓川をせき止めて現在の大正池をつくった。今回の爆発は昭和十四年いらいのもの。昭和にはいって十一回目の爆発。

昭和３７年６月１８日　　月曜日

岐阜日日新聞（夕刊）

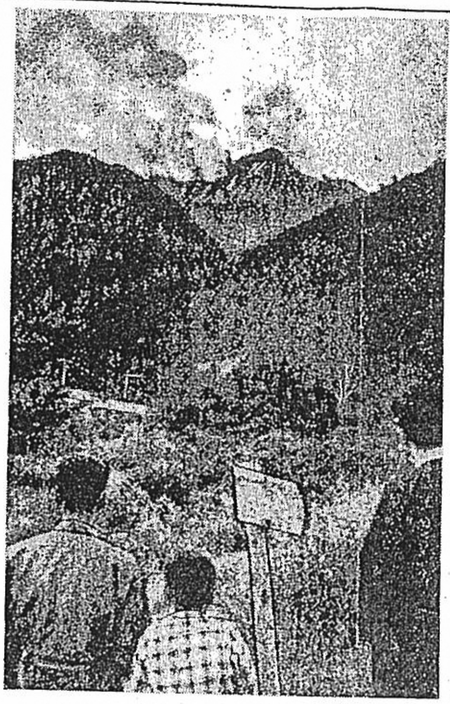
（第三種郵便物認可）

恐怖におののく村民

上宝村中尾　寝巻き姿で戸外へ

焼岳爆発

【神岡】＝中尾にて小島記者＝北ア焼岳噴火の報に今まで平和だった二十一戸、百人たらずの吉城郡上宝村中尾の小さな部落は恐怖のどん底におちいった。大正四年いらい四十七年ぶりの噴火なので、部落のほとんどのものがはじめて経験する恐ろしさである。山くずれかと思わせるぶきみな音とともに四すじの黒煙が大空にたえ間なくのぼりはじめたのだ。家がゆれ、しょうじがガタガタと音をたてる。部落じゅうのものが寝巻き姿のままで外へ飛び出し、避難準備をはじめた。しばらく地響きが続いたが、風向きが変わって"このぶんなら大丈夫"という声が、以前の経験でよく知っている人々の口から出た。避難は間もなく解除された。



噴煙を吹きあげる焼岳＝けさ上宝村中尾部落で

燃える山ハダ

噴火の上空を飛ぶ

【共同特別機にて岩田、川上記者】噴煙をいただいて静かに横たわる北アルプス連峰のなかで、焼岳だけがひとり"だだっ子"のように荒れ狂っていた。激しい勢いで吹き上げる噴煙、銀色の降灰で染め替えられた山はだ—登山者に親しまれた焼岳は爆発の一夜が明けると、その山容を一変していた。

○…午前六時半、東京から二百五十キロを一気に飛んだ。中部山岳地帯の中でもひときわ高く、けわしいアルプス連峰。雲海の中に白馬、剣、鹿島槍、穂高が幻の城のように浮かび上がった。そのいかった肩の切れるあたり、盛んに噴き上げる白い煙—変わり果てた焼岳の姿がダイナミックな感じで迫ってきた。

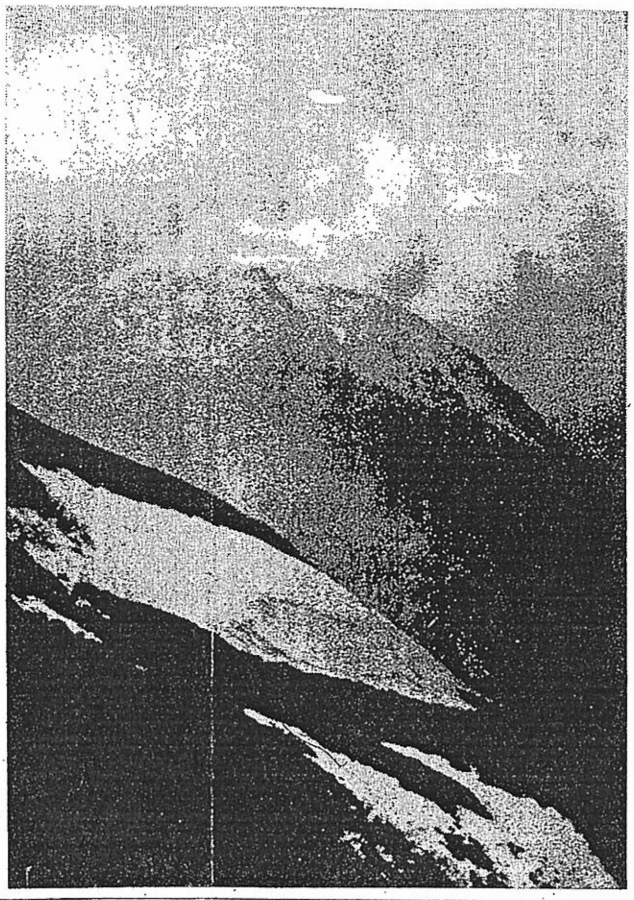
○…いつもはおわんを伏せたようなかわいい山。その焼岳の北面がきょうは一面の煙におおわれている。頂上近くの北側斜面が噴火の中心になっている。それも一つの火口からというより山全体から白煙をふき出している感じ。腐食と岩塊の山はだだが焼岳はきょうばかりは燃えに燃えている。噴煙の高さは約三千㍍、ちょうど背後にそびえる北ア最高峰の奥穂高と同じくらいの高さ。標高二千四百五十八㍍の焼岳は低いながらも活火山の力を精いっぱい誇示しているようだった。

○…中腹からあふれ出す泥流がすさまじい。火口壁から上堀沢、中堀沢へ、そして幾筋ものガレ場に向かって、銀灰色の泥がどんどん押し流されていく。大正四年、一瞬にして梓川をせきとめ大正池を出現した恐ろしい熱泥だ。その泥流が大正池の取り入れ口から梓川の上流付近まで流れ込んでいる。上高地の風物を代表した大正池の神秘的な湖面も半分ほど灰色に濁ってしまった。

○…中尾峠の針葉樹林も一面の灰色、焼岳小屋はあとかたもない。緑の上高地は絶え間なく降る灰をかぶって陰うつな世界に変わっている。そしていつもはあざやかな光を放つ梓川が濁った水をたたえて力なく伸びていた。

岐阜日日新聞　昭和３７年６月１８日付掲載（現岐阜新聞）

共同通信社配信



怒り続ける焼岳

無気味な地鳴り

火山ガス鼻をつく

【飛騨】北ア焼岳（二、四五八ﾒｰﾄﾙ）が大正四年いらいたびたび鳴動していたが、四十七年ぶりの大爆発をした。吉城郡上宝村中尾部落側の山頂直下数カ所から噴出する噴煙は十八日夕刻になっても衰えず、中尾部落と長野県上高地一帯は〝怒れるイオウの山〟におののき続けている。こんどの噴出の規模は十八日午後七時現在、いまも噴煙中の栃木県那須岳とほぼ同ていどのものとみられている。（写真はたけり狂う焼岳を乗鞍岳山頂から見おろす＝十八日午後三時写す）

焼岳を見おろす大展望台、乗鞍岳山頂へ登ってみると、眼前に見える焼岳が赤茶けた山はだのトロイデ型火山独特の肩をいからしたような格好をして乳白色の噴煙を西方へ流しながら、上空約三百ﾒｰﾄﾙまでまきあげている。噴煙と火山灰は上高地はもちろん穂高連峰、明神岳、六百山、霞沢岳あたりを灰色に包んでしまった。乗鞍山頂剣平あたりから見下ろすとすごい。十八日も終日、断続的に起きる鈍い〝ドーン〟という地鳴りとともにひときわ高く噴煙がまい上がりつづけた。風向きが変わって南方の乗鞍岳あたりへも鼻をつくすごい亜りゅう酸ガスの臭いがたちこめた。噴出現地の地獄絵図が手に取るよう。幸い焼岳小屋の管理人、[redacted]さんは、吉城郡上宝村側へ決死隊の手で救出された。さらに長野県[redacted]村の実家へリレーされた。両県側から同岳への登山はもちろん禁止された。焼岳と乗鞍岳の間にある平湯温泉の人たちは十八日から十九日朝にかけ上空をおおう噴煙に悩まされ、一睡もしていない。十八日午後四時すぎ北ア一帯に一時的なしゅう雨が襲い、たちこめていた火山灰は一応、地上にたたき落とされ、やや澄んだ天空となった。平湯温泉や中尾部落の人たちは頭上で続く無気味な噴出に夜も昼もない緊張の日夜である。

平湯に降る

【飛騨】十八日午後四時半ごろ、北ア一帯に約三十分にわたる一時的なしゅう雨があった。岐阜、長野県境安房峠、乗鞍山ろく平湯峠あたりでは直径約二ｾﾝﾁのひょうが降った。このため吉城郡上宝村の平湯小中校の窓ガラス数枚が割れた。このしゅう雨と焼岳の爆発とは関係があるかどうかはハッキリしていない。

火山灰かきわけ

無我夢中、はって脱出

焼岳小屋の管理人兄弟

【神岡】既報＝北ア焼岳の噴火で絶望視されていた焼岳小屋管理人の[redacted]さん（[redacted]）＝長野県[redacted]＝が十八日午後一時ごろ頭傷を負って飛騨側から吉城郡上宝村中尾部落にたどりついた。[redacted]さんは、さる五月十日から実兄の[redacted]さん（[redacted]）＝[redacted]＝と二人で同小屋を管理するため宿泊中、たまたま十七日は午後十時ごろ携帯ラジオでナイターを聞き終わり、床につこうとしたとたんのできごと。一瞬、耳をつんざくようなものすごいごう音とともに床下が大きくゆれ、そのまま小屋はつぶれた。兄の名前を呼んだが、どこにも見当たらず、ただ夢中で腰までつかる火山灰の中を抜け出し、一目散に山を下った。途中大きな落石に出会い、よけようとしたが間に合わず、右足にまともに当たり、一時歩くことができなかったので、岩かげで一時間ほどようすを見て、十八日午前零時ごろ、はいながら山を下り中尾地区にたどり着いた。[redacted]さんは栃尾診療所で手当てを受けたのち、駆けつけた家人につきそわれて帰宅したが、右足と両手に三カ月の重傷を負っていた。これで気づかわれていた小屋番人は二人とも無事だったわけ。

箱かぶって避難

[redacted]さん（兄）の話

【松本】噴火する焼岳の焼岳小屋から逃げ出し、九死に一生を得た[redacted]さんは収容された西穂山荘で「箱を頭にかぶって無我夢中で逃げた」と恐怖の一夜を次のように語った。

鳴動は午後八時ごろから始まったが、たいしたことはないと思っていた。弟の[redacted]と二人でラジオを聞きながら雑誌をみていたが、午後十時ごろ、突然ジェット機の爆発音を大きくしたような金属性の音がしたと思うと、小屋が上下にゆれ始めた。一瞬〝噴火だ〟と思い二人で脱手洞に避難した。だが、屋根を破って石が落ち始めたので、私は、物置きに逃げ込みカン詰めのはいった箱を頭の上にのせてうずくまった。このとき、[redacted]は外に逃げたのではないかと思う。一時間くらいうずくまっていたが、箱がちいさいのでヒザや手などがかくしきれないところに、ようしゃなく岩が降りかかった。箱に石が当たるたびに首がガクガクした。一時間ほどして、ようやく落岩が終わったので逃げようとしたが、腰まで岩や灰に埋まってしまい、もがき出るのにひと苦労した。足がきかないので、はいながら西穂へのりょう線へ逃げた。捜索隊にあったときは本当にうれしかった。

岐阜日日新聞　昭和３７年６月１９日付掲載（現岐阜新聞）

昭和37年6月19日　火曜日

岐　阜　日　日　新　聞

なってない火山防災体制

『危険外』だった焼岳

危険指定　"客が減る"と地元は非協力

北アルプス焼岳が十七日夜二度にわたって大噴火、地元の上高地一帯に溶岩や灰を降らせた。幸い登山客の被害はなかったが、近年の登山、観光ブームからいって、阿蘇、雲仙などでこんどのような規模の爆発が起これば、多数の観光客が死傷するおそれもあるという。これにたいし気象庁の観測陣は、ほとんど無防備状態というのが現状だ。

同庁地震課の話では、現在爆発のおそれのある火山は全国で約六十にのぼっているが、このうち阿蘇、浅間山など十三の火山はとくに噴火の危険度が高く、大きな被害を出すおそれがあるとして三十一年に危険指定し、常時観測の体制がしかれている。

しかし年間の予算はわずか百五十万円で、桜島、阿蘇、三原山、浅間山の四火山ではどうにか常時観測を続けているものの、残りの雲仙、霧島、三宅島、那須、北海道駒ケ岳、樽前、十勝、雌阿寒、有珠（うす）山の九火山では指定とは名ばかり、その半数以上が地元の鉱山会社に観測を委託しているのが実情だ。それもここ数年の不況で閉山する会社が続出、事実上観測を打ち切らざるを得ないという情勢になっている。したがって危険指定も受けていない焼岳の噴火は、同課員でも"青天のヘキレキ"と目ちょうしているありさまだ。

また霧島は三十三年の爆発後やっと指定なみの扱いを受けるようになったが、このほか同課では危険がじゅうぶん予測されるものとして磐梯、吾妻、白根、岩手などをあげている。焼岳も要注意の山とみていたが、現在では松本測候所の屋上からはるかに噴煙をながめるだけとあって、手の打ちようがなかったという。

また北海道の十勝岳でも六月にはいって「地震が毎月十回ていど起こり、新しい噴気口ができ、温度が五十—七〇度上昇、ガスの濃度が高まった」と地元鉱山会社の委託観測員からの報告がきているが、これだけのデータでは判断しにくく、いまのところ自前の観測の計画もない。一方、火山は観光地として地元では客集めに懸命だが、危険火山の指定を受けると客が減るとして地元からの協力もほとんど期待できないという。

また気象庁自体も地震課の定員のワクはわずか全国で十人しかなく、同課では「現在の気象庁の観測網ではどうにもならない。大学や研究所も各地で観測をやっているが、とかく研究のための研究になってしまうので、気象庁としては、防災を第一の目的とした全国的な観測体制の強化を要望している。このままでは不安でたまらない」と語っている。

噴煙見上げ一喜一憂

上宝村中尾　万一に備え避難準備

【神岡】十七日午後九時五十分ごろ、北アルプス焼岳の爆発で吉城郡上宝村中尾部落十七戸、約百人の住民は四十七年前、大正四年六月六日の大爆発の惨状を知っているだけに眠りつの一夜を明かして十八日早朝から万一に備え避難準備にかかり、無気味な地鳴りの連続で白煙を吹き上げる焼岳の形相に恐怖のまなざしを送っている。以下恐怖の部落、中尾の現地ルポ。（中尾で小島記者）

一家総がかりで避難準備をする吉城郡上宝村中尾部落の人たち

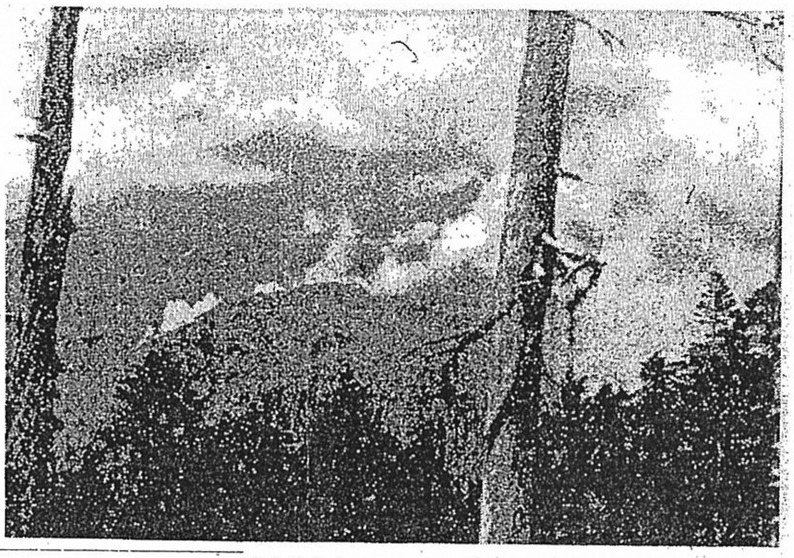
一家の生計を立てるにはどうしても必要だという牛を小屋から連れ出し、手入れするやら、荷車用のクラをつける用意をしたり、家財道具をかたづけるなどしていた。栃尾小中校に通う十六人の学童たちも下校と同時に一家総出でその準備におわれていた。それでもやはり先祖伝来の田んぼだけに手放したくないと田植えをしたばかりの稲の世話を忘れず、田んぼの見回りをしている老人も見受けられた。とにかく地元民は焼岳の様相の変わるたびに脅かされどうしだ。噴煙の様相も時間とともに間断なく変化、午前十一時ごろ白煙から爆発当時の黒煙に変わり、青い空を黒く染めたかと思うと午後になりやや下火のようす。そのたびに部落民は一喜一憂している。だが夕刻からは黒い雲と濃いガスに包まれ全く見えない。このため部落民の表情も不安とも安心ともつかない複雑な表情だ。

一方、あの焼岳の爆発が原因してか焼岳直下で中尾開発組合がボーリングしている温泉が熱湯を地上十メートルも吹き上げ、地元をびっくりさせている。なお神岡署では牛丸署長ら十人が現地のもようを視察するためジープで中尾部落へ駆けつけている。

岐阜日日新聞　昭和３７年６月１９日付掲載（現岐阜新聞）

昭和37年6月19日　火曜日

岐阜日日新聞（夕刊）



衰えながらも無気味な噴煙を上げる焼岳
＝猫岳のふもとから

噴煙やや衰える

焼岳 地元民ホッと一息

【高山支局・神岡】十七日夜、爆発した北ア焼岳（二、四五八㍍）は、十九日になってやや噴煙が衰えた。しかし断続的な小爆発が続き近くの住民は緊張を続けている。岐阜県側の山頂下二十数カ所から噴出していた噴気口の南側数個の噴煙が十九日早朝とまり、全体に噴煙の量が減っている。噴煙は十九日午前十時現在、晴れ上がった上空約三百㍍まで上がり、相変わらずの西風で長野県上高地側へ流されている。断続的に起こる爆発のため白い噴煙と火山灰はなおも周辺の山を包んでいる。

雨降れば火山灰流出

【神岡】焼岳麓の吉城郡上宝村で十八日午後十時から約一時間にわたって中尾部落にある足洗谷に鉄砲水が出て、土砂、火山灰をまじえたかなりの濁流が川底を洗った。幸いこの谷は深いため部落への影響はなかった。これは噴出によって積もった火山灰が地形を変え、一時せき止められていた水が急に流れ出たもの。

しかし住民たちは「足洗谷にこの水が流れ込んだからよかったが、これが部落へ流れ出たらどうなったか」と、なおも緊張を続けている。同岳の噴出場所から飛騨側中腹にかけては火山灰が約六十－七十㌢一面に積もっており、これがこんどの雨によってどっと流れ出したら、中尾部落と下流の宝温泉、蒲田温泉、栃尾部落が全滅するおそれもあるので、住民は再び避難準備をし、地元神岡署、消防署でも非常体勢をとっている。

岐阜日日新聞　昭和３７年６月１９日付掲載（現岐阜新聞）

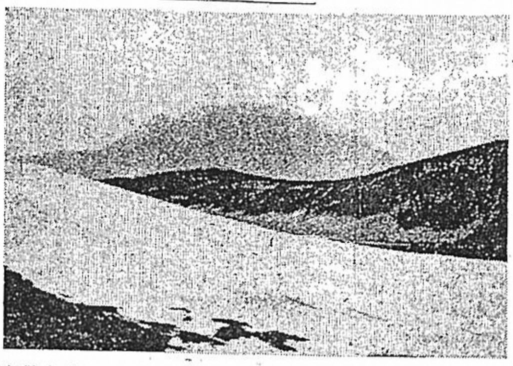
駄々っ子焼岳

乗鞍岳から見る再度の爆発

モクモクと噴煙

視界ゼロ 灰色の目かくし

【飛騨】乗鞍山頂で浮田記者＝十七日夜爆発した焼岳（二、四五八メートル）は再び午後二時九分同二時十八分と同四時二十分の三回爆発した。爆発音は、それぞれ三回続き、高山市でも"ズシン"という地響きが感じられた。噴火のもようを調べるため記者は早速、焼岳の大展望台といわれる乗鞍岳の山頂に登り"怒れる硫黄の岳"を望んだ。



なおも噴煙を上げ続ける焼岳＝乗鞍山頂鶴ケ池から。手前鶴ケ池、向こうは雲海

この日は前日に比べガスが多く、大野郡丹生川村からでは焼岳は望見できなかった。平湯峠（一、六八四メートル）頂上へさしかかって照山にかくれていた焼岳がガスのあい間にすごい迫力で視野にとびこんできた。かなりの量の乳白色の噴煙が上空へ吹き上げている。

あいかわらず吉城郡上宝村の中尾部落側の全噴気口から吹き上げる噴煙が一度約三百メートル上空まで吹き上げられ、すぐに西風に流されて長野県上高地側へなびいている。峠頂上から宗教橋の登山バス道路にそって亜高山帯にはいる。大正四年同じ焼岳大爆発のとき、降りかかる火山灰のため枯れてしまった枯れ木の間から目前に見えがくれする焼岳を見た。文字どおりの焼岳だ。草木のない赤茶けたドーム型の山容がいつになく大きく見える。バックにひかえる穂高連峰の岩はだにきざむシマ模様の残雪が噴煙のため見えかくれする。吹き上げる噴煙の音が聞こえるよう。

森林帯を抜けて桔梗ケ原につく。このあたりはすでに焼岳山頂と同じ高さだ。真横に見る怒れる焼岳の山頂は狂う地底の悪魔をかいま見るようで無気味だ。吹き上げる火山灰と噴煙は長野県側へ流れてゆく。うちつづく山なみのうち、焼岳が東側の前穂高岳、明神岳、霞沢岳、さらに長野県安曇村、松本市方面までが灰色に曇っている。晴れていれば桔梗ケ原から見えるはずの上高地帝国ホテルの赤い屋根も火山灰をかぶったのか目につかない。松本市の家なみも灰色の層にさえぎられている。

焼岳は乗鞍火山帯にある北アルプス唯一の活火山。その南隣で活動を休んでいる親子格の乗鞍岳をからかうように焼岳からときどき噴煙のかたまりがはい松の上を逃げるようにすぎてゆく。同時に鼻をつく亜硫酸ガスの臭いが眼下で噴煙をつづける焼岳の怒りを伝えている。夏なら登山者の群れでにぎわう山頂鶴ケ池あたりは、まだ残雪が残っていて、雪渓と噴煙の対照がいかにも山岳地らしい自然の偉大さを教えてくれる。それにしても遠く真正面に見る浅間山の爆りののんびりしたこと。不消ケ池の大雪渓で焼岳の噴煙を見ながらサマースキーを楽しんでいるグループの姿とともに察負いこんで山頂へ駆け登った記者にちょっぴり人心地を与えてくれる。

あの噴煙の下で二人の[redacted]さんが火山王と降灰を頭から浴びながら必死に逃げのびたという山男のたのもしさもすぐ隣の乗鞍山頂から見おろしてみて印象が強くなろうというものだ。

小爆発続く

【松本】十九日夕長野県警察署にはいった報告によると、焼岳は同日午後二時九分、同二時十八分、同四時二十分の三回にわたって爆発、約四百メートルの噴煙を吹きあげ、なお活動を続けている。二度目の爆発は相当大きな爆発音を伴ったが降灰はなかった。岐阜県高山測候所と松本測候所上高地観測所でもやはり三回にわたって空気振動を記録した。

深さ一メートルもの泥流

中尾部落

【神岡】北ア焼岳の噴煙は十九日朝になってやや衰えたが、同日午後、二度にわたって中爆発をしいぜん活動を続けている。ガスが出て吉城郡上宝村中尾部落からは噴煙の状況はよく見えない。

中尾部落上流の足洗谷には同日朝までに火山灰など噴出物が堆いねん土状となって流れ出した。ガスの合い間から見ると山頂の火口から流出した噴出物が何本かの筋を作っている。この泥流は先に完成した中尾部落から約二キロ上流の建設省神通川水系砂防工事事務所の足洗谷砂防ダムを越してすり落ち、ダムのすぐ下にある木橋（長さ十メートル、幅三メートル）をこわした。泥はこの橋から約二十メートル下まで押し出されている。一灰色のねん土状のもので、深いところは一メートル積もっている。山頂にはもっと積もっており、雨が降ると、これがどっと流れ出し、中尾部落はもちん下流の宝温泉などの家屋、田畑が全部流失するおそれがあるので、地元では非常体制をとっている。足洗谷から流れ出る水はどす黒い流れ、下流の神岡町地内の高原川でも濁っている。高山測候所では二十五日ごろからまた雨が降り出すもようだ、といっているので、そのころが心配されている。神岡署などでは、万一の場合に備えるよう住民に注意している。また同署は焼岳への登山を禁止、岐阜県警本部を通じて全国の各警察署へ通達した。

一面の泥海、ひざまで埋まる焼岳の噴出物＝上宝村中尾で

岐阜日日新聞　昭和３７年６月２０日付掲載（現岐阜新聞）

泥流におののく

焼岳飛騨側の中尾部落

流れ落ちる焼岳噴火の火山灰の泥流＝中尾部落で

雨が来たら一ナメ

噴煙いくぶん衰える

【飛騨】北ア焼岳の噴煙は十九日新しく爆発した噴火口も含めていくぶん衰えた。しかし、ほっと胸をなでおろした焼岳飛騨側の吉城郡上宝村中尾部落とその下流の住民に新たな恐怖が追い打ちをかけている。

噴出して山腹に積もった火山灰が二、三日中に予想される雨で下流へ押し流され、家とうのように家屋、田畑を押しつぶしてしまう恐れがあるからだ。焼岳は地形的な関係でいつでも岐阜県側から長野県側へ抜ける西風が吹いて噴出火山灰などの噴出物は大部分は長野県側へ落ちるが、もともと飛騨側にできた噴火口なのだから飛騨側へも多量の火山灰を積もらせてくる。山頂近くは一メートル、山腹の中尾部落上方では六十センチもある。火山灰は焼岳の断層を切って流れる足洗谷に沿って押し出されているが、その先端は中尾部落から約一キロ上方建設省神通川水系砂防工事事務所の足洗谷えん堤の下流までできている。足洗谷えん堤は昨年完成したばかりの堤長約八十メートルの大えん堤だが、これを約二万立方メートルの火山灰が埋めてしまい、堤を乗り越えさらに下流の木橋をも押しつぶした。

山頂ではどんどん火山灰を吹き上げており、降り積もる一方。足洗谷の水は濁り蒲田川へ合流さらに高原川を濁らせて、日本海にそそいでいる。足洗谷は中尾部落の横に深く切り込んだ谷で、今のところ部落に被害はない。しかし、雨が降ると心配になる。高山測候所では二十四日ごろからまた雨模様になる。雨が降ると火山灰は谷川の水とは関係ない流路を作りながら下流へ押し出される。中尾部落二十一戸の家屋と田畑が埋まってしまう恐れがある。さらに下流の宝温泉、蒲田川沿いの蒲田温泉など旅館街も危い。このあたりは川幅が広いが川床が高いので泥流はどこをねらうかわからない、神坂地内に神坂えん堤があって一応ここで泥流の勢いは止まるだろうか、火山灰の量によってこれをも乗り越して下流の折尾部落の密集する民家をものむかも知れない。上空から現地調査した東大地震研究所の水上教授は「雨後の泥流が心配だ」といっている。

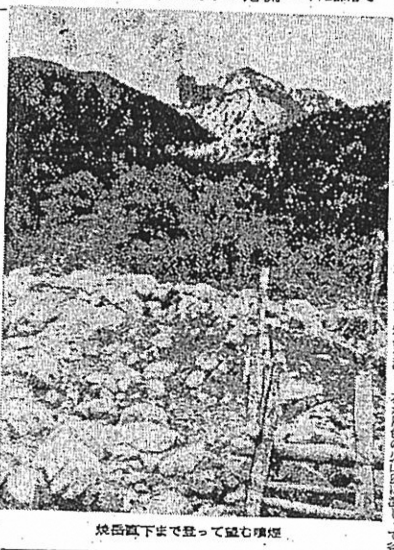
神岡署と高井上宝村長はこの方面へ十九日避難準備を命じた。泥流は水を濁し、下流高原川水系のアユ三十万尾をも全滅する恐れがあるので高原川漁業協同組合では七月七日に予定していたアユ解禁を十九日に繰り上げた。一難去ってまた一難、焼岳飛騨側へはまたもや新しい不安が襲いかかった形である。

一面に火山灰と岩石

焼岳ま下の足洗谷一帯

【神岡】再び爆発した焼岳は、きのうとうって変わって美しく晴れ上がった青空に怒りの姿をみせた。十七日の大爆発以来二回の小爆発で怒りの形相は、その激しさを加えている。二十日早朝、焼岳を源に、吉城郡上宝村中尾に流れる足洗谷の最上流まで登り、その様相をながめてみた。

中尾部落に面した東側八カ所、西側一カ所に大きな口をあけた火口からマワタを思わせるような白煙が約百メートルの上空に立ち登り、相変わらず長野県上高地側に流れている。十九日午後の足洗谷までの道路をさらに押し進め、同谷最上流の焼岳の真下まで登山した。あたり一面は爆発と同時に吹き飛ばされた直径三―四メートルの岩石と火口から間断なく吹き出す火山灰、夏ミカンを思わすようなくぼみだらけの岩石が灰色の火山灰に混じって谷間一面に押し流されている。この火山灰の上をいく筋にもわたり朝日に輝きながら谷間にそそぐ水はきのうの黒味もややさめて灰色に変わっている。曲がりくねった登山道も途中、火山灰や大小の岩石にさえぎられ、あとかたもない。青々とした野草も無残に焼けただれ、生気をみなぎらせていた緑のこずえも灰色に塗りつぶされて"死の山"を思わせて痛々しい感じ。



焼岳真下まで登って望む噴煙

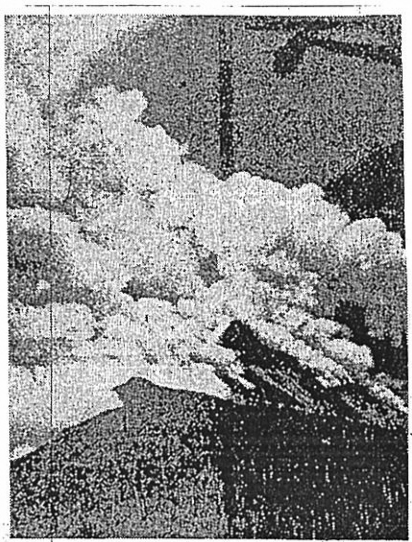
岐阜日日新聞　昭和３７年６月２０日付掲載（現岐阜新聞）

北飛遭難救助隊

怒る焼岳を現地調査

うなり立てる火口

火山弾跡ハチの巣状に



目前に見る焼岳噴火口

【神岡】なおも噴煙を上げ、怒り続ける北アの火口を見きわめようと、吉城郡上宝村神坂、北飛山岳遭難救助隊長、今田勇さんら六人は二十日、現地調査に向かったが、火山灰をかきわけての必死の登頂でまのあたりに噴火口を見てきた今田隊長は次のように語った。

中尾部落から出発したわれわれはいつもと変わらぬ樹林帯を縫っていったが、煙りをあげる焼岳を目の前に見える尾根へ出たとたん、思わず身ぶるいをした。ちょうど焼岳まで三㌔くらいの地点だろうか。新緑の木は火山灰でかっ色のように変わり果てて、直径三十㌢から二㍍もある石が火山灰の泥流に落ち込み、まるでハチの巣を思わせる光景だった。火口付近は長だ円形のミゾ。火口の五㍍近くまではい寄ってみると、ゴウゴウと溶岩が煮えくりかえる音が聞こえ、亜硫酸ガスで息もつまりそうだった。火口は飛騨側は中尾部落からみて中央はぽっかりえぐりとられていた。焼岳の小屋の周囲は厚さ二十㌢ほどの火山灰で一ぱい。付近の登山道もズタズタで当時のすさまじさを物語っていた。

すゞ新　銀座通 ②0517

焼岳に観測陣　東大震研

【上高地】十七日の噴火後三日も噴煙を吐き続けている焼岳を観測するため、東大地震研究所の文部技官平賀士郎、鈴木喜吉、宮崎務の三氏は二十日上高地に到着、村営ホテルを基地に上高地の八カ所に地震計を据え付けた。一行はいまのところ十日間にわたって観測する予定で、二十五日すぎには同研究所火山物理学担当の水上武教授も加わり①爆発はどういう性質のものか②再爆発はあるか③噴煙はいつまで続くか—などを観測する。

また信州大文理学部地質学教室の小林国夫教授ら三人も、同日上高地に着き調査をはじめた。

大和サロン
☆雨にたたられる演説☆
雨降って地盤固まらぬ
—参院立候補者—
大和証券　提供

岐阜日日新聞　昭和３７年６月２１日付掲載（現岐阜新聞）